
緋弾のARIA 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

柳之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

【Nコード】

N5134Y

【作者名】

柳之助

【あらすじ】

「あー、レキといちゃつきてー」

この物語は那須家きつての落ちこぼれである俺、那須蒼一が、嫁であり主人であるレキといちゃつきながら、武偵をする話である。ついでに友人である遠山キンジを手助けしたり、しなかつたりする話でもある。

ついでに言えばいつの間にか世界レベルで戦っちゃう話ですらある。まあ、そんな話ではあるが、とりあえずレキの可愛いさを理解して

くれればそれでいいよ。

応援支援感想頼むぜ？

そうしたらーなるべく派手な技を決めてやるからな。

登場人物紹介

那須蒼一

年齢 16

職業 高校生

所属 無し

称号 『拳士最強』 『落ちこぼれ』

所有能力 気

身長 168cm

体重 73kg

武偵ランク E

髪色 黒

瞳色 蒼

性格 理不尽系クール

先祖 那須与一

趣味 アニメ ライトノベル マンガ エロゲー

必殺技一覧

・虚刀流

一の奥義 『鏡花水月』

二の奥義 『花鳥風月』

三の奥義 『百花繚乱』

四の奥義 『柳緑花紅』

五の奥義 『飛花落葉』

六の奥義 『錦上添花』

七の奥義 『落花狼藉』
八の奥義 『
九の奥義 『快刀乱花』
十の奥義 『
最終奥義 『七花八裂』
最終奥義 『七花八裂・改』
二の最終奥義 『

・ 『蒼の一撃シリーズ』

第一番 『
第二番 『
第三番 『
第四番 『
第五番 『支蒼滅裂』
第六番 『天蒼行空』
第七番 『
第八番 『
第九番 『
第十番 『
第十一番 『蒼和雷同』
第十二番 『
第十三番 『
終ノ番 『
第零番 『

New!

・ 走法 宙弾き

登場人物紹介（後書き）

随時更新予定。

プロローグ 「あー、レキといちやっつきでー」
by 那須蒼一 (前書き)

とりあえず、短いプロローグ

ブローグ 「あー、レキといちゃつきてー」by那須蒼一

空から女の子が降って来るなんてあるだろうか？
いや、ない。

そんな事がありえるのは知り合いの根暗ハーレム男だけであろう。
少なくとも俺、那須蒼一にはない。

これまでもなかったし、これからもないだろう。

この俺にあったことは。

この那須家きつての落ちこぼれである俺にあったことといえば。

半年前の十月。

知り合い以上、友達未満の女の子に。

ライフルを突きつけられ。

求婚されたぐらいである。

目が覚めた。

季節は四月。

長袖にするか半袖にするか悩む季節だ。といっても本日より高校二年である俺には制服の長袖がほとんどなのだけれど。

ベッドから起き上がり、周りを見渡してみる。

男子寮の寝室。

二段ベッドで寝ているから、視点は高い。

ベッドの下端には我がルームメイトにして男の敵たる根暗ハーレム

男の遠山キンジが睡眠中だ。
相も変わらず暗そうな顔をしているが、あのゼロの使い魔かかの幻想殺しかというほど美少女を惹きつける男である。
もはや、新車の誘惑成分を発しているとしても俺は驚かない。
キンジンとか。

いや、こいつは血筋てきな理由があるからトオヤマンとかだろうか。

ピンポーン。

間の抜けた音が響く。

ああ、またこの根暗に誘われた美少女が一人。
時計を見れば現在七時。

下に降りてキンジを観察してみる。
起きる気配はなかった。

「ふむ」

とりあえずかかと落としをキメてみた。

「ぐほお！？」

「おお、くの字」

腹からきれいなくの字に折れ曲がった。

「何だ！？ 敵襲か！？」

「いや、お客さんだ」

跳ね起きて周囲を警戒するキンジ。
それに優しく声をかけてやる。

「ん、ああ。白雪か……。ところで蒼一」

「ん？」

「なんか腹が誰かにかかと落としされたように痛むんだが……。知らないか？」

「知らん、とつとと玄関行けよ」

「あ、ああ」

寝間着のまま出て行くキンジ。
彼を見送り、ベランダに出て空を見上げる。
自らの朝の行いを思い返して、

「うん」

「一つ頷いて、」

「いいことした朝は気分がいいなあ」

今日もいい日になりそうだ。

あ、星伽の悲鳴が聞こえた。

キンジの寝間着にでも興奮したのだろうか。

しかし、しかしだ。

俺、那須蒼一の予想は外れることになる。

おおよそ全てのことに対して非才の身だか勘も大したこと無かつたらしい。

この日より、俺はルームメイトとそのパートナーのせいで始め成り行き、途中からは自ら、世界レベルでの戦いの中に飛び込むことになるのであった。

「あー、レキといちゃつきてー」

無論、今はまだ知らない。

ブログ 「あー、レキといちゃつきでー」「by那須蒼一（後書き）

感想待つてまーす。

……ブログただけだけど。

今日もう一度更新したいとおもいます。

第1巻 「そんな、かわいいだなんてー何を今更な」byレキ

いいことしたなあ、と思いつつ部屋に入り制服に着替えておく。
部屋を出てリビングまでいけば。

「おいおい、そりゃあ確かに今日は始業式だけどさ」

机の上に広げられていたのは豪華絢爛な朝飯だった。
デカイ重箱に納められたら色とりどりの食事の数々。

お正月か。

「あ、おはよう。那須くん」

「おう、おはようさん。星伽、どれ」

あいさつもそこそこに、重箱のおかずを手を伸ばすが、

「いじり」

「あいた」

キンジにはたかれた。

「なにすんだよ」

「せっかく白雪が作ってくれたんだから、ちゃんと頂きますくらい
言え」

「へいへい」

不承不承で俺が頷いている横では、

「キ、キンちゃんが私のためにお、怒って……はっっ」

星伽がトリップしていた。

まったく、キンジが絡まなければまとものだが。

スタイル抜群の大和撫子で超能力捜査研究科《SSR》の秘密兵器にして生徒会長、園芸部部长、女子バレー部部长、手芸部部长を兼任し、拳げ句の果てには平均偏差値四十五の武偵校において脅威の偏差値七十五を叩き出すハイスペック。

聞けば誰もが尊敬するような才媛だが、その正体は俺から言わせればただの色ボケだ。

もし仮に、彼女の脳内を調べて見れば占められているのは“愛しのキンちゃん”に間違いない。

欲望の怪物が生まれたら、絶対にキンジを拉致るか、周囲の女子を撲滅するだろう。

恐ろしや。

もつとも、欲望に忠実なのは人のこと言えないのだが。

それゆえに、食事前のあいさつもせずにおかずを摘もうとしたのは、御覧の通り星伽にいい思いをさせるためである。

決して俺の行儀が悪い訳ではない。

決してない。

とりあえず俺も座る。

三人で手を合わせて。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

三人で食後のミカンを頬張る。

ちなみに俺は自分で剥いたがキンジは星伽に剥いてもらっていた。
子供か。

「いつもありがとな」

「えっ。あ、キンちゃんもありがとっ……ありがとっございます」

「なんでお前がありがとっなんだよ。ていつか三つ指っくな。土下
座してるみたいだぞ」

「だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから…
…」

……ミカンうめー。
とりあえず、星伽の下着が見えて興奮しているだろうキンジは放
っておく。

七時四十五分。

武偵殺しやら女難の相やら話し続けている二人を置いて、男子寮
を出る。

自転車を押して向かう先は女子寮だ。

今年から入ったであろう一年生は不審な目を向けるが、二年以上
には慣れたものである。

入口には一人の少女。

ただの少女、ではない。

美少女である。

澄んだ翡翠の髪。

透き通った無機質ともみえる琥珀色の瞳。

抱きしめたくなるような矮躯。

アンバランスなヘッドホンですら少女の魅力の手助けとなってい
る。

背には長い棒状の袋を背負っている。

触れれば、壊れそうな儂い雰囲気を纏う少女。

彼女が。

彼女こそが。

俺、那須蒼一の主にして恋人。

本名不詳の美少女。

魔弾の姫君、レキである。

「おはようございます、蒼一さん」

「おう、おはよう。レキ」

ほんのわずかに。

それこそ俺にしか分からないくらいに笑った。
今日も相変わらずかわいいなあ。
思わずにやける。

オマケに口に出していたらしい。

レキが反応して、

「そんな、かわいいだなんてー何を今更な」

なんか大分レキもエクストリームはいつてきたが大丈夫だろうか。
まあ、いいか。
かわいいし。

「失礼します」

レキが自転車の荷台な横向きに座る。

彼女の片腕が自分の腰に回ったのを確認して、

「じゃ、出さずせ」

そんな風に。

なんかこう純愛カップル風に出発したのは良かった。

途中で、バスに乗れなかったらしいキンジに遭遇したのはまだ許せる。

そのせいで二人きりの時間がなくなったのも許そう。

俺は、器の大きい男なのだから。

だが、だがしかし。

いくら何でもー

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

などと、某ボーカロイドので脅されるなんて有り得ないだろう。

第1巻 「そんな、かわいいたなんてー何を今更な」byレキ（後書き）

なかなか話が進まない……

次回、戦闘シーンあります。

感謝謝辞

チキン執事様、プーモ様感想ありがとうございます。これからも頑
張らせていただきます。

12/4

レキの髪色の描写修正。

第2巻 「なんでお前は自分と自分の嫁のことしか頭にないんだよー!」 b y 遠山

「ぬおおおおおー!」

「をおおおおおー!」

「……………」

後ろにはレキが、横にはキンジがいる。

グラウンドを走る。

自転車を漕ぐ。

ただ走っているのではない。

爆走である。

何が悲しくて、四月始めから自転車で爆走しなければならないか
というと。

俺とキンジの後ろ。

数メートル離れて俺達を追いかけてくるのは。

「な、なんでー!」

キンジが横で叫んだ。

「なんで朝から強襲科マサルトの校舎らへんからいきなり現れたUZI装備
のセグウェイに追いかけてられて、自転車に仕掛けられたら爆弾にビ
ビリながら学園島爆走しなきゃなんないんだー!」

……………つむ。

やたら長い説明口調ありがとう。

キングが叫んだ通り、俺とレキにオマケで登校し。
俺とキング《……………》が所属する、強襲科^{アサルト}の校舎でそれは現れた。

セグウェイである。

だだのセグウェイじゃあなかった。

UZI装備である。

ボイスは某ボーカロイドである。

二機同時である。

需要ねえよ。

「蒼一、なんとかならないか!？」

「なんとかって言われてもなあ……………レキ？」

「難しいです」

レキは愛銃ドラグノフに目を遣り、

「今の状況では流石に二機同時落とすのは難しいですし、落としても増援が来ないとも限りませし」

「だよなあ……」

ちよつと考えてみる。

ふむ。

「キンジ！ プランA出来たけど聞くか!？」

「聞かせる!」

態度がデカイ気がするか今は気にしない。
後で締めるが。

「まず、俺がレキを抱えて跳ぶ」

「それで?」

「自転車はこの際諦めて、一度キンジに引き付ける」

「それから?」

「キンジが何か新しい力に目覚めるのを期待して俺とレキは登校する」

「目覚めるかー!」

やかましい。

そこか主人公属性でどうにかしろ。

「なんでお前は自分と自分の嫁の事しか頭がないんだよ！」

おいおい、なんてこと言うんだ。

そんなこと言われたら、

「照れるなあ」

「照れるなー！」

「……案外余裕ですね、二人共」

と、まあ。

案外余裕を持っていた俺たちだが。

いい加減どうにかしたいなあ、と思いだした頃だった。

「ん？」

先に気づいたのはキンジだった。

視線の先はとある女子寮の屋上。

いたのは一人の少女だった。

武偵校のセーラー服にピンクのツインテールの小柄な少女。

何か背負っているようだが、よく見えなかった。
とりあえず視力をあげてみた《……………》。
確認すれば、

「……………パラグライダー？」

「そのようですね……………まさか」

素でも両目の視力6.0を誇るとんでも視力の、レキも確認したらしい。

そのレキの僅かに驚いた声と同時に。

「はあ!？」

飛んだ。

キンジの間抜け声が響く。

空中にてパラグライダーを展開。

そのままこちらに飛んでくる。

「バ、バカ! この自転車には爆弾が……………」

今更遅い。

だが、キンジの叫びももつとだ。

こつちには自転車付き爆弾と、UZI装備の誰得セグウェイがある。
そんなのに突っ込むのは自殺行為だ。

ある程度の実力が伴わないかぎり。

しかし。

彼女は相応の実力の持ち主だったらしい。

両太腿のホルスターから銃を抜く。

黒と銀のガバメントによる二丁拳銃。
それらを構え、

「ほら、そのバカとも！ さっさと頭を下げなさいよ！」

ぱんぱんぱんぱん。

四発が四発ともセグウェイのタイヤに命中する。
後ろに転がっていった。

それは実に歓迎すべきことだが、

「異議あり！ バカはその根暗だけで……うおっ！」

「そんなのに引つかかっている時点で十分バカよ！」

おっしやる通りで。

それはともかくかなりの腕前だ。

パラグライダー装備での精密射撃などそうできはしない。
少なくとも俺にはまず無理だ。

銃火器の類は苦手である。

謎の飛行少女は俺とキンジを交互に見るが。

「バカじゃないこと証明してやるからあっちのバカを頼む」

判断は一瞬。

少女は意識をキンジに向ける。

その上で姿勢を変える。

頭を下に、持ち手に足を引っ掛ける。

そのままキンジをかつさらうのだろう。

向こうはもういいと判断。
俺達も逃げるとしよう。

「レキ」

「はい」

「飛んでくれ」

「ーはい」

飛んだ。荷台から後ろへ。

なんの迷いもなく。

なんの躊躇いもなく。

なんの疑いもなく。

跳んだ。

車体が重さを無くす。

かなりのスピードで走っていたため、地面落ちたら最悪死ぬ。
がしかし。

この俺がそんなことをさせる訳がない。

かつて実家とのいざこざがあり人間不信の人間嫌いだったがとある吸血鬼もどきのように美少女だけは例外だと謳ってきたこの俺に限っては有り得ない。

コンマ数秒の差をもって俺自身も跳んだ。

ただ跳んだだけではない。

「おりゃ！」

思い切り蹴飛ばした。

自転車がひしゃげぶっ飛ぶが、確認せずに後ろを向く。

着地。

特殊合金を仕込んだ靴底から火花が散ったが気にしない。
スライディング気味に飛び込んで。

「お待たせ、ハニー」

「お気になさらず、ダーリン」

受け止めた。

お姫様抱っこである。

キンジに視線を移せば、

「ふぼっ！」

謎の飛行少女の胸に頭を突っ込んでいた。

ドカーン。

自転車が爆発した。

そんな感じで。

美少女をお姫様抱っこして。

美少女の胸に頭突っ込んで。

俺達はセグウェイから逃れた。

「しつこいなあ」

セグウェイから逃れたはずだった。

しかし、

「これ、倒しても倒しても出てくる無限ループじゃないよな」

「さすがないと思いますけど」

先ほどレキが予想したように。

お姫様抱っこでセグウェイから逃れた俺達に。

やっぱりUZI装備のセグウェイが来た。

今度は7台。

俺達2人を半円で囲うように来た。

「やれやれ、しつこい奴は嫌われるって相場がきまってるぜ？」

「私はしつこくても蒼一さんが好きですよ」

「当然俺もだ」

さてと。

構える。

足は大きく開き、腰を深く落としいー

左足を前に出して爪先を正面に向けて。

右足は後ろに引いて爪先は右に開き。

右手を上に乗手で左手を下にして、手は平手。

相手に壁を作るような構え。

とある無刀の剣法の一の構え。

「来いよ、最強の拳を教えてやるっ」

拳士最強、那須蒼一推して参る。

気。

およそあらゆるバトル漫画に登場する代表的な異能である。

生命力を戦闘力に変えるスキル。

気力を実力に変えるスキルである。

視力を強化して遠くを見たり。

脚力を強化して自転車を蹴り飛ばしたり。

俺は。

那須蒼一はそれが使える。

那須蒼一の唯一にして絶対のスキルだ。

それは俺が。

ありとあらゆる才能から見放されたこの俺が。

那須家の落ちこぼれである俺が。

才能に見放され、落ちこぼれであるがゆえに得たスキルである。

それをもって俺は、自らを最強の拳士だと名乗るのだ。

「気を使えるとなんか良いっていえば、漫画や小説の技が大体使えるってことだ」

虚刀流。

虚しき刀の流れ。

とある刀集めの物語に出てくる最強の剣法。

刀を使わない剣法。

現在、俺のお気に入り流派。

呟きながら、セグウェイとの距離をゼロにした。

ただ近づいたのではない。

気を宿した脚で地面を蹴り、そのまま前蹴りである。

その時間は僅か0.5秒。

「虚刀流、『薔薇』——！」

一機破壊。

さらに隣の二機掛けて、独楽の如き後ろ回し蹴り。

「虚刀流、『牡丹』——！」

三機破壊。

右端の奴に近づき、気を宿した鋼の如き貫手を繰り出す。

「虚刀流、『蒲公英』——！」

セグウェイの車体に突き刺さり、そのまま左端のにぶん投げる。

激突、破壊。

五機破壊。

其処にしてようやく他のセグウェイが動いた。

残りの二機がこちらを向き、

ばばばばばん。

ばばばばばん。

連続で発砲した。

がしかし。

着弾点に俺はもういない。

セグウェイがこちらを向いたと同時に跳躍。

そのまま脚を足刀に見立てた、前方三回転のかかと落とし——！

「虚刀流七の奥義、『落花狼藉』——！」

一機がまるでプレスされたように縦にひしゃげた。

六機破壊。

続いて最後の二機を狙おうとして、

ぱあ——ん。

最後の二機が吹き飛ばされ、大破する。

見ればレキが立ち膝でライフルを構えていた。
全機破壊。
戦闘終了。

「ふう」

予期せぬ無駄な戦闘に溜め息一つ。

「サンキュ、レキ」

「いえ、夫を支えるのも妻の役目ですので」

おお。う。

そんなこと言われたらテンション上がったちゃうぜ！
どうしよう。

どのようにしてこのハイテンションを表現しようか。

「蒼一さん」

レキがこちらに来た。

おお、ここは抱擁からのキスだろうか、いやしかし朝からグラ
ドの真ん中でそれはどうなのだろうか、まあいいか。いや、ほら頑
張ったしね俺。だからご褒美が必要であって、それがたまたまレキ
とのハグアンドキスなだけで別にそんなにしたいわけじゃないから
だって別にこんなタイミングじゃなくてもできるし、いや本当いう
仕方ないっていうかでもレキが、してくれるのなら受け取らないと
悪いし。だから、まあいいか。
うん。

心のなかで、言い訳を展開し尽くし、

「さあ、カモンハニー！」

両腕を広げて待ちかまえる。

「はあ」

別にそれはいいですけど。

「遠山さんたちのこと、忘れてません？」

「……………あ」

体躯倉庫。

ちよつとした戦場になったいたそこを俺達は二人して覗いていた。
もっともキンジも謎の飛行少女ももういないのだが。

事の一部始終を覗いていて、

「なあ、レキ」

「はい」

「友人が性犯罪に走った場合どうすればいいのだろうか」

「笑えばいいんじゃないですか？」

そうか。

「はははは」

……笑えねえよ。

そんな安いネタでもねえし。

セグウェイどもはこちらにも来ていたがすでに破壊されていた。

問題はそれを破壊したのがキンジだということだ。

素のキンジにはできないだろうから、つまりなった《・・・》の
だろう。

問題は、

「状況的にさっきの飛行少女だろ……どう見ても中学生が下手した
ら小学生だぞ」

「あれだけ周りに女性がいるのに何もなかったのはーなるほど、
少女趣味だったんですね」

「だな……」

これは一武偵として捕まえなければならぬだろうか。でも部
屋が広くなってラッキーかも。

それに一人暮らし。

魅力的な単語。

まあ、飯が問題だけ……待てよ。

「キングがいないと星伽が来ない……あの飯が食べなくなるのはなあ」

それは惜しい。

仕方ないので見逃してやろう。

脅しのネタ程度で許してやる。

俺って優しい。

腕の裾を惹かれた。

「蒼一さん、料理なら私もできますよ」

「……言うておくが、この前のカロリーメイトの盛り合わせは料理じゃないぞ」

「もちろんですーSOYJOYの和え物なんてどうでしょうか」

「それも料理じゃねえよ」

栄養食品から離れる。

第2巻 「なんでお前は自分と自分の嫁のことしか頭にないんだよー!」 b y 遠山

主人公紹介とかやったほうがいいでしょうか。
見たい人は言ってください。

感想頂けるとテンションあがります。

もしよかったら一言でもお願いします。

11/27修正しました。

第3巻「……風穴開けるわよ！」by神崎・H・アリア

「武偵殺し？」

結局俺たち三人は始業式に出れず^{マスターズ}教務科に朝の爆弾騒ぎを報告し
終え、教室へと向かっていた。

「……の模倣犯だよ」

ものすごくげんなりしたキンジは言った。
背負っている空気が暗い。

「確かに先日逮捕されたと報道がありましたね」

「そつえば、朝お前と星伽が話してたな……」

「ああ……」

かなり元気ない。
理由はまあ、解っているが。

「ん？口、どうしたんだ？リ、さっきから、コ、元気が、ン
無いぜ？」が

「何やら不愉快な副音声が聞こえるんだが……！？」

「ダメですよ、蒼一さん。遠山さんは今大変なんですからー己の
隠された性癖に気づいて」

「この外道夫婦が……！」

また、夫婦だなんて。

照れるなあ。

「いいか？俺のは体質だし、大体あいつは高2だった！」

「でも見た目小学生相手になったんだろ？ロリコンじゃねえか」

「それに興奮したことをそんな威張られても。変態ですね」

「この……！」

廊下にキンジの声が木霊する。

「どーせ、もう会うことなんかないだろうからいい加減止めろ！」

.....

「先生、あたしはあいつの隣に座りたい」

「フラグだったー!?!」

21A教室が一気にざわめいた。

一瞬の後に、

「うおー！ またキンジか！」

「さすが特級フラグ建築士！」

「くそ、俺星伽さんに賭けてたのに！ 良妻系幼なじみが負けたと
!?!」

「俺は戦妹アミカの風魔にかけたんだけどなあ！ 教え子忍者なんていない
ぜ!?!」

「理子は色物過ぎたか!?! ゴスロリ巨乳でいいじゃん！」

「俺なんか大穴狙いで通信科コネクトの中知空で賭けてたんだけどなあ！
武偵高が誇る前髪枠が！」

「くそ、ピンクツインテロリの転校生だなんて胴元の一人勝ちじゃ
ねえか！」

「まてまてまてまて、何の話をしてる！ というか胴元って誰だよ
!?!」

皆が一斉に俺の方を指で指した。

その指は俺を貫通し後ろの席にいたレキを指している。

「おいおい、お前ら——人の嫁疑うなよ」

「お前だ——！！」

やかましい。

件の少女——神崎・H・アリアーはやかましい連中を無視して、キンジの前まで来て、

「キンジ、これ。さっきのベルト」

一瞬で静かになった。

思うことは一つだ。

え、もうそこまでいったの？

……まあ、実際はそんな話じゃないんだが。
面白いので言わない。

「理子分かった！ 分かっちゃた——これフラグばっきばきにた
ってるよ！」

叫んだのはキンジに左隣の金髪ゴスロリ女、峰理子だ。

キンジ曰わく、探偵科ナンバーワンのバカ女。
俺曰わく、キンジハーレムの一員。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテール
さんが持ってた！ これ謎でしょ！？ これ謎でしょ！？ でも理
子には推理できた！ できちゃった！」

うるせえ。

謎の踊りを披露しながら叫ぶ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は――熱
い熱い、恋愛の真っ最中何だよ！」

セクハラで始まった恋愛はありなのだろうか？

周囲は理子の推理に聞き入っている。

キンジは何言ってるんだこいつ、という顔をしている。
やっぱり面白いので放っておく。

「ソーくんに負けないくらいの！」

「誰に負けないだとお、キンジ!？」

「俺か!？」

「いいぜ、見せつけてやろうじゃねえか！ レキ！」

「いいでしよっ！」

ノリノリだ!？、と皆が叫んだ瞬間。

ずぎゅぎゅん！

二発の銃声がクラスを凍りつかせた。
音の下は、顔を真っ赤にした神崎。

「れ、恋愛なんて……くだらない！」

翼のように広げた両腕の先、左右の壁には穴が一つずつ。

理子は謎の踊りの姿勢のまま席に着き、レキはヘッドホンの音量を上げて目を閉じて着席。

いや、それは逆に危ない。

「全員覚えてきなさい！　そういうバカなこと言う奴には……」

それが神崎・H・アリアの武偵高に発した第一声。

「――風穴開けるわよ！」

……決めゼリフかけえなあ。

第3巻「……風穴開けるわよ!」by神崎・H・アリア(後書き)

嫁レキが何気に人気(笑)。

携帯で書いていると、長文が書きにくいので基本このくらいな長さでやっています。

第4巻 「このー！DXカツ丼定食780円を！」 by 風魔陽菜

「し、師匠、本気でござるか？」

「ああ。構わん」

焦ったような声を出すのは諜報科レサトの一年、風魔陽菜。
それに答えたのは彼女と戦妹契約を結んだ強襲科アサルト二年、遠山キン
ジ。

「で、ですが、師匠！ 某には………!!」

「お前への正当な報酬なんだ。気にするな」

「し、師匠………」

風魔は感極まったように笑顔を浮かべ、しかし戒めるように首
を振り、

「ですが、この身は未だ修行中の身ゆえやはり受け入れられないで
ござる」

「まったく………」

キンジは呆れたように首を振り、

「分かった。お前が受け取らなければ、これは棄てる」

「……師匠………そこまで某の事を………」

そして、風魔は意を決し、

「了解にござる。この不肖風魔陽菜、師匠のお気持ち受け取らせて頂くでござる。そして、そして！ 噛み締めさせて頂くにござる、師匠の一番弟子と成れた事と師匠から承るこのー」

風魔はもはや涙すら流し、

「このーDXカツ丼定食780円を！」

目の前の丼を食らいに行った。

「ああ、よく味わえ」

キングはしみじみ言った。

「……」

「……」

なにこの茶番。

……

「神崎・H・アリア、強襲科所属でランクはSランクにござる。モグモグ」

「Sランク……、レキと一緒にか」

「ついでに言えば一年前のお前とも一緒だ」

「私は現在進行系でSランクですが」

昼休み、学食にて。俺、レキ、キンジ、風魔はいた。

キンジの頼みで神崎について調査をした風魔の報告を聞くためだ。俺は中華定食。

レキはカレー。

キンジは和風定食をそれぞれ注文していた、

「某が知る限りでは使用武器は二刀と二丁拳銃。また、バーリ・トウードの達人、ロンドンで活躍していたらしいにござる。ハグハグ」

「ああ、それは実際朝味わった」

「活躍って、どんなもんかわかるか？」

「さすがに時間が無かったので、そこまでは……。噂では失敗したことがないとか……」

「それはそれは……」

口元が歪む。

天才、というやつか。

大違いだ。

実家において失敗続きだった俺とは。

そして、天才といえばー。

「蒼一さん」

「ん」

「そういう蒼一さんはカツ」よくないですよ

「そりゃ失敬」

やれやれ。

嫁には頭があらんよ。

「……それで？ 他に知っていることはあるか？」

「あ、後は……」二つ名が『双剣双銃カトラのエリア』ということくらいしか分からないでござる」

「『双剣双銃』、か……」

キンジは呟き、

「ありがとな、風魔。また、何かあったら頼む」

「御意。で某はこれで。ごちそうさまにござりました」

いつの間にかカツ井を平らげていた風魔がは一度、懐から煙玉ら

しきものを取り出し、

「……」

周り、即ち昼食中の他の生徒を見て。
しまつて、普通に小走りで帰つてた。

「……さすがにこんなところで煙玉は使わなかつたか」

「お前、自分の戦妹アミカのことどう思つてたんだよ」

「それにしても……若干情報が少ないように思えますが」

「分かつてる。後で理子にも調査を依頼するつもりだ」

「峰か、まあ悪くない人選だ」

あのおもしろ女はスペックは高いからなあ。
変人だけだ。

「きつと向こうも」

レキか、ポツリと言つた。

「きつと向こうもキンジさんや蒼一さんのことを調べてるんでしょ
うね」

「だろうな……」

「まったく酔狂な奴だな、おい」

レキはともかく、

「Eランクの俺たちの事を何を調べるんだか」

.....

「.....どういうこと？」

神崎・H・アリアは戸惑っていた。

朝の三人について軽く聞き込みをした事についてだ。

遠山キンジが一年にしてSランクだったにも関わらず、今年もEランクになっていることにはない。

レキが本名不肖出身地不明にして、自らと同じSランクの武偵であることにではない。

那須蒼一。

こいつだ。

那須蒼一が拳士最強を名乗っていることだ。

何故ならば自分が知る拳士最強は――彼ではない。

「あの噂.....ホントだったってこと？」

自分が武偵高に転校する少し前のこと。

アリアの知る拳士最強——握拳烈にぎけんれつが。

この極東の地にてとある武偵高の生徒と戦い、命を落としたとい
う——あの噂は。

真実だったということか。

第4巻 「このー！DXカツ丼定食780円を！」 by 風魔陽菜（後書き）

冒頭で真面目な話だと勘違いした人は何人いるかな？

この作品、メイン投稿の『流転の悪役』よりお気に入り登録や、評価ポイントの伸びが良くて少し複雑。

終わクロや、恋姫が、好きな人は読んでみてくださいください。

11/29 風魔の口調修正

第5巻」 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」bY那須蒼一（前書き）

ちよっとシリアス回。

第5巻 「 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」 b y那須蒼一

「キンジ、あんたあたしの奴隷になりなさい！」

「……………」

「……………」

「……………」

自分の部屋に帰って、リビングの扉を開けたらルームメイトが特殊なプレイに誘われていた。

どっしりよじり。

……………

ひとまず、空きかけのリビングのドアを閉める。

レキと顔を見合わせ、

「おいおいおいおい、キンジの奴授業終わってソッコー帰ったと思っただら何してんだよ」

「キンジさん、そこまで特殊な性癖があったんですね　やはり」

「ロリコンでDMか　だと思ったぜ」

「バーン、という音と共にドアが蹴り開けられた。

「そこはせめてまさかとも言えよ、この外道ども………！」

息を荒くしたキンジだ。

レキを庇うように前が出る。

レキも俺の後ろに隠れる。

「おいおい、興奮すんなよ」

「きゃー、怖いですー」

「お前ら………！」

「キンジ、飲み物くらい出しなさいよ！」

リビングの中から神崎の声。

「コーヒー！　エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！　砂糖はカンナ
！」

呪文かよ。

もはやキンジは、もういやだこいつらという顔をしてリビングに戻っていく。

……淹れるんかい。

.....

もくもくと湯気を上げるインスタントコーヒー。
ソファに座った神崎はそれを物珍しそうに眺め、

「これホントにコーヒー？」

などとおっしゃった。

それ以外のコーヒーなんて知らない。

「……ヘンな味、ギリシャコーヒーにちょっと似てる……。ん
でもちよつと違う……。」

ブツブツとつぶやきながらコーヒーを飲んでいる。

「ギリシャコーヒーって、どこのメーカーだ？」

「普通にギリシャ産ってことじゃないですか？」

ああ、なるほど。

「味もメーカーも産地もどうでもいい、それよりもだ」

キンジもコーヒー片手にソファに座り、

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその……お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る」

軽くキンジが頭を下げた。

……いつの間にかシリアスに。

「でもだからってなんでここに押しかけてくる？」

「分んないの？」

「分るかよ」

神崎は少し意外そうな顔をし、

「あんたならとつくの昔に分ってると思ったのに。まあ、いいわそのうち思い当たるでしょ」

神崎が肘かけにもたれる。

「おなかすいた、なんかないの？」

あ、今キンジがドキッとした。

「ね、ねーよ」

「ないわけないでしょ、あんたたち普段何食べてんのよ」

神崎の視線がこちらに向いた。

「カロリーメイトです」

「実は霞が主食なんだよ」

「……いつも下のコンビニだ」

スルーしやがった。

「じゃあ行きましょう。あ、そうだ」

神崎はソファから立ち上がって、キンジの顔を覗き込み、

「そこって『松本屋』のももまんってある？ あたし食べたいな」

と、キンジを赤くさせている横で。

「……私たち若干空気なような」

レキが小さく呟いたのを聞き逃さなかった。
言っなよ。

.....

「握拳裂^{りぎけんれつ}つて知ってる？」

それはキンジが神崎の命令によりコンビニにはしらされ、出て行って突然聞かれた問いだった。
突然の問いに対し、

「俺の師匠だ」

間髪いれずに答えた。

「」

ふう、俺はため息をついた。

隣で僅かにレキが身を固くしたが、それには構わず、

「つーか、自己紹介まだだったよな。那須蒼一だ」

「……レキです」

「神崎・H・アリアよ……それよりも、師匠？」

「ああ、10歳の時から15歳までだったけどな。それがどうかしたか？」

神崎は眉を細めて、

「……あんた、拳士最強とか名乗ってるらしいわね」

「ああ、きちんと前任者から襲名したぜ」

「なら、握拳裂からあんたは拳士最強を引き継いだってこと……?」

「そうだけど、それがどうかしたのか?」

「……私はロンドンで拳士最強は握拳裂っていう日本人って聞いた。でもこの武偵高に来てからはそれはあんたで、ついでに気になる噂もロンドンで聞いたわ」

「へえ、どんな」

レキは何も言わず目を伏している。

「『日本で握拳裂は武偵高の生徒と戦って死んだ』。つまりこれって……」

「ああ、そうだ」

俺は一度区切り、無表情で言った。

「握拳裂は俺が殺した」

「!」

神崎の目が見開かれる。

レキは無言で俺のシャツの裾を握った。

……かわいいなあ。

「勿論、簡単に殺したわけじゃないぜ」

そういつて俺はネクタイを緩めた。

シャツのボタンを外し、下シャツも脱ぐ。

神崎は一瞬顔を赤くしたが下シャツの下にあったモノを見て、またも目を見開いた。

黒髪に蒼みが掛った目、顔つきもそれなりな俺の見た目。

引き締まった筋肉質の身体にそれはあった。

傷跡だ。

左肩から腰まである縦の傷跡。

それに交叉する、左の脇腹から右肩に走る斜めの傷跡。

心臓のあたりを中心とした十字の傷跡だ。

「ほかの痕は消せたけど、コイツは深すぎて消せなかった。まあ、一生残るわな」

そして、もちろんそれだけではない。

レキも今は無言で隣にいただけだが、彼女自身も胸の中央に何か刺さったような傷跡がある。

無論、それは俺は言わない。

「ついでに言えば、俺が今Eランクなのもそのせいだ」

「」

「武偵憲章第九条、それも守れないような奴はEがお似合いだよな」

もっとも、それ以前から俺のランクはCランクだったのだが。

「なあ、神崎」

言葉を失った神崎に俺は声を掛ける。

「俺はお前がどういつつもり《……………》か大体分かる」

「！！」

音を立てて勢いよく立ちあがった。

「ああ、勘違いすんなよ、お前の素姓とかは知らん。でも何のためにキンジに近付いたかは分る」

「……………あたしには、時間が、ない、のよ」

絞り出したような声だった。

まるで何かわるいことをして、しかしそれを認められないような声だった。

「そうか、別に俺は何も言わない」

実を言えば半年以上前、レキに惚れる前の俺も似たようなモノだった。

戦う意味を探していた頃。

戦い覚悟を求めていた頃。

「きつと、お前の探してるのはキンジだろうさ」

自らの主を探していた俺。

神崎も自分にとってのナニカをさがしているのだろう。
そのナニカは大体予想はつく。
だが。

「だが、もしもお前の都合でキンジを傷つけてみる」

「」

朝、彼女自身が言った決め台詞をそのまま返すように、

「その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」

言った。

「……あんた、やけにアイツのこと庇うのね」

「ああ？ 当然だろ」

俺は誇らしげに胸を張る。

なぜならアイツは。

「俺の親友だ」

もっとも、本人の前では絶対言わないが。
あ、帰ってきた。

第5巻「その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」b y那須蒼一（後書き）

嫁レキ空気回。

ちよつと語られた蒼一の過去。

これでも30パーセントくらい。

まだまだいろいろあります。

早く過去編をやりたいなあ。

魔剣編より先にやっちゃおうかなあ。

宣伝

龍之介の活動報告のPV予告ボタンに刀語×戯言、人間シリーズの予告あります。

できればコメントとかください。

感想も期待させていただきます。

第6巻 「 フラグですねぇ」byレキ

アサルト
強襲科でパーティーを組む。

それが神崎・H・アリアが遠山キンジへの依頼だった。
以下、その時の二人の会話。

「キンジ、あんたあたしとパーティー組みなさい」

「……まさかそれ言うために来たのか？」

「ええ、何か文句あるの？」

「いや、それなら学校で十分だろ」

「……」

「……」

「……何よ」

「……別に。それにいきなり言われてもこま」

「風穴」

「は？」

「受けなきゃ、風穴」

「いやだから」

「風穴二連」

「」

「風穴五」

「よろしくな、アリア！」

以上である。

暴君かつ。

まあ、それはともかく。

こうして、遠山キンジと神崎・H・アリアのパーティーは誕生した。

.....

アサルト
強襲科。

通称、『明日なき学科』。

奇人変人変態外道のバーゲンセールの如き武偵高においても命の危険性においてはダントツのトップ。

生存率、97.1%。

100人に3人は卒業出来ずに命を落とすことになるまさしく死

と隣合わせの場所だ。

武偵、即ち武装探偵で真つ先に思い浮かばれるスタイルだ。故に4ヶ月前。

武偵高の学園島とそれに隣接する空き地島が。

そのどちらもが、とある戦闘たたかひの余波により半壊した時も。優先的に修復された校舎のひとつである。

最も4月現在では、完全に学園島も空き地島も修復されているのだが。
そのなごころはたまかく

閑話休題。

アサルト 基本的には強襲科クエストの任務は荒事ばかりである。

.....

「キンジ、そっち行ったぞ！」

「応！」

俺は街の路地裏をキンジと共にはしっていた。

「く、来るなあー！」

帽子を目深にかぶった男。
そいつを追跡中だった。

「来るなど言われて来ない馬鹿がいるかぁー！」

「俺は悪いことはしてない！　ただ、愛に生きてるだけだ！　そ
う、即ち愛の戦士！」

入り組んだ路地裏を迷いなく男は走っていく。

速えな、おい。

ギャグ補正か！

「なにが愛の戦士だ！　そういうのを世間一般様ではなぁ、こつこつ
うだよ！」

俺とキンジが、追っている男。

そいつに指差し、

「この、ストーカーー！」

「違う！　愛の戦士だ！」

違わねえよ。

強襲科アサルトに持ち込まれた任務クエストで、数多い一つ。
ストーカー対策である。

まあ、対策というのは方便で実際は退治である。

中には示談で済ませる武偵もいるのだが、俺の場合。

「面倒だから、とりあえずぶん殴る！」

「ぶっちゃけすぎだ、馬鹿！」

そう言いつつ、キンジも殴るくせに。

.....

神崎・H・アリアは見下ろしていた。

街を、ではない。

街を走っている遠山キンジである。

ビルの屋上の端に腕を組みながら、昨日パーティーを組んだばかりの男を見下ろしていた。

ストーカーを居っているキンジを見て思うことは、

「 なんか違うわねえ」

先日、自分に見せてくれた。

魅せつけられたあの時の彼とは違う。

「キンジさんにもいろいろあるという事です」

レキだ。

自分の横、同じくビルの端で腰掛けいる。

視線の先は恐らく、那須蒼一だろう。

それはともかく。

「あなたはそれを知ってるわけ？」

「ええ、まあ。成り行きですが」

いろいろねえ。

誰にでも事情があるのは当然か。

那須蒼一も。

レキも。

遠山キンジ。

そしてもちろん、自分だって　　。

「それと、アリアさん。一つ言っておきたいことがあるんです」

「なによ」

「気をつけてくださいね」

「な、なにによ」

「惚れないように」

「は、はあ？」

「キンジさんにですよ」

惚れないように。

気をつけてください。

「い、言ったでしょう。あたしはそういつには……！」

顔を林檎のごとく赤く染めながら反論するが。

レキはそれを横目で見て。

やれやれ。

「フラグですねえ」

第6巻 「 フラグですねえ」byleki(後書き)

あんまり中身がなかったかなあ。

先日、ひさびさに感想が来たのでヒッター投稿しちゃいました。

しかし、未だに主人公の決め台詞が決まらなくてどうしようかなあ？

感想期待してまーす。

第7巻 「お前どつかでみてたろー!」 by 遠山キンジ (前書き)

余りの短さに投稿直後に加筆。

第7巻 「お前どつかでみてたろー！」 b y 遠山キンジ

「ちょっと、どこ行くのよ！ キンジ！」

「どこだっついていいだろ！ ついて来んな！」

「言わないと風穴ー！」

「ゲーセンだよ！」

「あたしも連れてきなさいよ、そこに！」

「なんでだよ！」

放課後、叫び合いながら走っていくキンジと神崎を見た。
仲良いなあ。

.....

二人がパーティー組んでから数日しか経ってないが随分仲良くなっているようだ。

「やっぱり、ああいうツンデレの類は落ちるのが早い」

「世界中のツンデレに土下座してください」

レキがツンデレの擁護に回ってしまった。

「いや、別にツンデレが嫌いなわけじゃないぜ？」

「そ、そんなことを言う蒼一さんのためにやってるんじゃないですからねっ」

ツンデレだ……。

しかし、完全無表情なので迫力がない。

「蒼一さんキンジさんやアリアさんにはっかかり構っていると全身の骨砕いて標本にしますよ？」

ヤンデレだ……。

無表情なのでかなり怖い。

「私はただ蒼一さんが構ってくれないのが寂しいだけです」

クーデレだ……。

ていうか素だろ。

「悪い悪い、なんか放っておけなくてなあ」

「なんだかんだでお人好しですね」

「欲望に忠実なだけだぜ？」

いいんですよ、それで。

と、レキは言う。

「それでこそ、蒼一さんです」

ほんの少しだけ微笑んだ。

.....

寮の部屋に帰る。

基本的にレキは夜遅くまでこっちにおいて夜遅くなったら女子寮に戻っている。

する事は基本、アニメ鑑賞。

今日見たのは、

「.....私もバカン狙撃手スナイパーと言われたいものです」

この一言で理解できるだろう。

ていうか止めてくれ。

そして、キンジが帰ってきて、やたら疲れていたの。

「どうしたんだよ、キンジ。まるでー」

「いや、別にー」

「まるでゲームセンターを知らなかった神崎を連れて行ったら神崎がクレイニングゲームのストラップのレオポンを取ろうとムキになってしまっただけで取ってやったら二個取れちゃって思わずハイタッチしちゃってどっちが先に携帯に付けれるか競争までして予想以上に嬉しがる姿にときめいちゃったみたいじゃないか」

「お前どっかで見てたろー！」

「知るかー！」

乱闘になった。

何故だ。

携帯についていたストラップを地味に狙ってやったらさらにキレた。

その時レキは、

「今季のアニソンは豊作ですね……ヘッドホンに入れておかないと」

自由すぎだろお前。

.....

俺とキンジの乱闘とレキのヘッドホンに曲を入れ終わり。
夕食時。

「アリアがリアル貴族だった」

なん、だと……！

レキも目を見開いている。

「玉の輿狙いか……！」

「なんと 最低な発想ですね、キンジさん」

「最低なのはお前らだ……！」

レキを下がらせて再び乱闘。
五分後。

お互いの顔を腫らして椅子に座り直した。

「それで？ 他に新しく分かったことは」

「14歳からロンドンの武偵局に所属、ヨーロッパで活躍してたんだが　驚くなよ?」

「誰が驚くか、さつさと言え」

「狙った犯罪者を逃がした事はなく、99回一発逮捕」

「なにい!?!」

「尋常じゃないほど驚いてますね」

いや、驚ろくなというのが無理だろ。
それよりも、

「それ、ホントか……?」

「ああ、理子からの情報だからな。間違いないだろ」

んん?

神崎がキンジに求めていることは何となく分かる。

分かるからこそその業績は予想外だった。

武偵としてそこまでの能力がありながら、どうしてキンジを求め
る……?」

そこまでの能力があるなら必要ないだろう。

「あと、実家とはあまり仲が良くないらしい」

「その貴族のお家とですか?」

「ああ」

ふうん。

「そこらへんに理由があるというんことか？」

「おいおい……困ったなあ」

家族関係で問題あるとか。

放っておけねえじゃねえか。

家族は大事にというのが、俺のモットーだ。

最も、今はレキとキンジ以外の家族なんて二人しかいないんだが。

まあ、だからこそキンジには一つ忠告しておこう。

「キンジ」

「なんだよ」

「玉の輿狙いはいいが　ロリコンの罵りは覚悟しとけよ」

三度目の乱闘が始まった。

第7巻 「お前どつかでみてたるー！」 by 遠山キンジ（後書き）

相変わらず嫁レキが大人気。
嬉しい限りです。

ついでに巡クロから落ち拳に來た人や落ち拳から巡クロに行く人が
いて嬉しいです。

そして、遂に主人公の決め台詞が決定！

意見を出してくれた方々ありがとうございました！

決め台詞発表はもう少しお待ちください。

次回はバスジャック。

早く戦わせたい。

感想、期待してます。

当作品は感想の来れば来るほど更新速度が上がりますので（笑）。

明日は……どうしようか。

第8巻「ま、Sランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」by神埼・H・ア

この話を読む前に、前話の加筆分を見てない方は見てね。
少し増やしました。

前回かなり少なかったので今回長め。

第8巻「ま、Sランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」by神崎・H・ア

確かにその日は気持ちのいい朝ではなかった。

台風接近のせいで大雨。

肌にまとわりつく気持ち悪い湿度。

サボるか迷ったが、キンジをいじり、レキの可愛さを糧としてな
んとか登校。

そこで、テンションは低かった。

そして。

バスに乗れず、徒歩でレキと相合い傘をしながら。

俺たちが乗り遅れた武偵高行きのバスがジャックされたという連
絡を神崎から受けた時気づいた。

あ、今日は厄日だ。

.....

大雨の下の女子寮の屋上。

そこに俺たちはいた。

キンジと神崎はC装備

強襲用の攻撃型装備

を装備し、俺

とレキは防弾制服のままだ。

神崎は無線を手にし何か怒鳴っている。

が、俺たちに視線を移し、

「ま、Sランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」

キンジがすごくいやな顔をし

「どういう意味だ、アリア」

「そのままの意味よ、この面子ならアイツ《……》にも対抗できる」

「アイツ………?」

レキが首を傾げた。

く……。

こんな場面じゃなきゃ抱きしめてる所なんだが………!

「『武偵殺し』よ」

………ん?

「おいおい、神崎。そいつは捕まったはずだろ?」

「そいつは真犯人じゃない。真犯人は別にいるわ」

断言された。

何か………知ってるのか?

「根拠は?」

短く、鋭いレキの問いも。

「話してる時間は無いわ、バスには爆弾も積まれているはずよ」

取り付く島もない。

まさしく『独唱曲』^{ソリア}だった。

「やれやれ、どうする？ キンジ」

「どうするって言われてもな」

続きは聞けなかった。

より大きい音が屋上を支配したのである。

へりの音だ。

車輜^{ロツ}科のシングルローター・へりが女子寮に降り立とうとしてい
るのだ。

手際がいいな、おい。

これじゃあ、話してる時間はない。

ていうか。

へりを使うという事は。

すなわち上空からバスに跳び下りる………？

あ、ヤベ。

「キンジ」

俺が冷や汗を流している間。

「これがアンタとの最初の事件ね 期待してるわよ」

「や、やめてくれ、買いかぶりすぎだ」

「買いかぶりならそれはそれで安心しなさい。あたしが守ってあげるから」

キンジ。

赤くなつてんじゃねえ。

お前の方が最近赤面症だ。

.....

レキたちがへりで屋上を去った後。

未だ俺は一人で女子寮の玄関前にいた。

作戦から外れたというわけではない。

もつと単純な理由だ。

もつと情けない理由だ。

俺、那須蒼一は。

なんと、パラシュートをまともに使えないのである。

……いや、滑空するくらいならなんとかできる。

だが、この大雨の中は無理である。

それを言った時の神崎の顔は中々面白かった。

残念ながら俺が乗れる乗り物は、自転車とバイクくらいだ。

他は絶賛練習中。

もつとも。

それを理由にして何もしないわけではない。
インカムを装着し、通信を繋げる。

「えーと、オペレーターは誰だ？ ……なんだ、くーちゃんか。よかつたよかつた。え？ くーちゃんはやめる？ つれない事言うなよ、くーちゃんはうちの嫁の数少ない友達なんだからさ。くーちゃんも友達少ないだろ？ ん？名誉棄損？ はははは、そんなこと言うなよ。ホントのことだろ。つーか、オペレーターがくーちゃんです。安心してらんだぜ？」

言いながら構える。

足を平行に前後へと配置し、膝を落とし、腰を曲げ、上半身を軽く前傾させる。両手は抜き手の形で、肘を直角の角度に、これも平行に前後へと配置する。体重は前方に向けられているようで、若干、前のめりの体勢である。

顔は正面に向け 学園島の外の方角に向く。

今にも駆け出しそうな 動の構え。

「なにせ、レキとキンジ以外に」

虚刀流七の構え、『杜若』。

同時に気で限界まで両足を強化。

「本気で走る俺をナビゲート出来るのはくーちゃんぐらいだからなっ！」

よーい、どんっ！

地面を砕きながら、駆け出した。

状況は最悪だった。

アリアは独断専行と言っている判断と支持にキンジと共にバスの屋根上に着地。

キンジはバス内に犯人がいないことを確認し、アリアは爆弾を発見。

C4爆弾が3500立方センチメートル。

爆発すればバスどころか電車ですら吹き飛ばす。

犯人はドSらしい。

アリアが解体を試みた所で、後ろにいたスーパーカーが激突。

直後に車内へ発砲。

運転手が負傷し車輛科の優等生《問題児》武藤剛気。

彼の免停確定の事実と対してカツコ良くない決め台詞を受け取って、屋根の上に乗って。

キンジを庇ってアリアが被弾した。

「アリア、アリア！」

名前を呼んでも、彼女に反応をない。

頭を銃弾が掠めたのだ。

すぐに病院に連れて行かれないければ危ない。

だが、まだ危機は去ってないのだ。

再びスーパーカー　ルノーから発砲されたら。

思い、アリアの身体をキンジが抱きしめた瞬間に来た。

.....

『あと5秒』

走る、走る、走る。

『4』

封鎖されている道路故に他の車を気にする必要はない。

『3』

全速で走り、バスとルノーを視界に入れた瞬間さらに加速。

『2』

そして、跳んだ。

『1』

キンジが神崎を抱きしめているのを確認しつつ。

前方三回転の踵落としをルノーに叩き込む！

「虚刀流七の奥義『落花狼藉』

！」

固定されていた銃ごとルノーを破壊する。

『0』

その勢いでそのままさらに跳躍し、バスへと飛び乗る。
そして、

『到着です』

「すまん、遅くなった」

「遅えよ、この馬鹿！」

おいおい。

女子寮からここまで走ってきたんだぜ？

もっと、褒めてくれてもいいだろうに。

だが、まあ。

この状況なら仕方ない。

「どんな塩梅だ？」

「息はしてる、けど頭に被弾したんだ。なにかあってもおかしくないー！」

「落ちつけ」

言いながら、神崎の傷口に触れる。

どろりとした血液が指に触れるがきになっている場合ではない。
彼女に自分の気を流しこむ。

気には治癒力を回復させる力もあるのだ。

量によっては致命傷でもある程度は回復で来る。

もっとも傷のみなので、脳はどうしようもない。

「傷はこれでいい、さっさと病院だな」

「だが、爆弾を何とかしないと！」

「そいつは……どうしよう？」

「ちゃんと考えろ！」

考えてるさ。

酷いなあ。

思った所で。

『那須さん、新たにバスに近づくルノーがいます！』

くーちゃんの声が聞こえた。

そして見る。

「おいおい、そりゃあないぜ」

やはりルノーだ。

いつものまにかいた。

封鎖されていたはずの道路に。

先ほどと同じ。

それは対して問題ではない。

載っているモノが問題だった。

狙撃銃。

アンチマテリアルライフル・バレットM82A1。

1,5キロメートル先の敵兵も両断できる強力な対物戦車ライフル。

それが載っていた。

発砲され被弾すれば俺たちどころかバスの屋根も吹き飛ばす。

そんな代物が今にも銃弾を吐きだす直前！

ソレの存在を確認した瞬間に叫んだ。

「キンジ！ 神崎連れて下に行け！ ついでに中の連中を前の方に集める！」

叫びながら構える。

両足は前後に広げ、左足は前、右足は後ろにしつま先はどちらも前に。

腰を大きく捻って、右肩を大きく開き、右腕を後ろへ振りかぶる。左。腕は前へ突きだす。

手はどちらも軽く広げる。

右手を大きく振りかぶる動の構え。

虚刀流 ではない。

それを見た瞬間、キンジは血相を変えてバス内に跳び込む。

コレの意味を理解できたからだろう。

これの、この構えの意味は。

.....

「全員、前の方に来い！」

キンジは中に入った途端に叫んだ。
全員ともきよとんとしたが、

「蒼一が」

続くキンジの言葉を聞き、

「拳士最強が本気を出すぞ！」

反応は迅速だった。

全員が転がり込んだ。

もつれ合いながら、それでもキンジはアリアを庇う。
そして。

バアンという音を聞いた瞬間。

「天蒼行空」

バスの屋根、前半分が吹き飛んだ。

第8巻「ま、Sランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」by神埼・H・ア

相も変わらず嫁レキの人気は止まらない……！

自分で書いて、何回も確認してるとよくわかんないですよね。

どなたかどのくらいうちの嫁レキが笑激的（誤字にあらず）か教えてくれないですかねえ……？

くーちゃんがだれかはわかりますよね？

ええ、あの前髪っ子です。

感想、期待させていただきますよー。

どんどんお願いします！

次回、嫁レキヒヤッハータイム。

第9巻 「心を弾丸に

『魔弾姫君へスナイプリンセス』

byレキ

街の風景が流れていく。

「ぐ、あ、あ……」

痛みに顔しかめる

バスの上でへたりこむ。

跳ね上がったバスの屋根前の部分に背を預ける。

「蒼一！無事か!？」

バスからキンジが出てきた。

そんなに慌てんなよ。

「よう、なんとかなつたぜ？ とりあえず」

「まだ終わってないし、どこか怪我は …！」

いやいや。

無いわけないだろ。

「お前、腕が！」

そう。

今、現在俺の右腕はボロボロ立った。

指は五本とも変な方向に向き、腕は裂傷でスタスタだ。

拳士が手を潰すなんて、文字通り両腕をもがれたのに等しい。

気を使っても完治に二週間はかかるだろう。

それでも。

コレですんだくらいでましかもしれない。
なにせ

「こんな場所でアンチマテリアルライフルの弾丸を叩き落とすのは無茶だったか」

「当たり前だろ！」

飛来した弾丸を平手で叩き落としたのだが。

バスの上という場所が問題だった。

単純な踏み込みの動作が出来ないからだ。

もし本気で俺がバスの上で踏み込んだら、それだけでバスが壊れる。

それゆえに足場の悪い時用の奥義『天蒼行空』^{てんそうぎゆうくう}だったが、流石にアンチマテリアルライフルの弾丸の相手は想定外だった。

第一それでも、バスの屋根は半ば吹き飛んだのだ。

「くそ、地面の上ならこんな怪我はしないんだけどなあ！」

「負け惜しみかよ！」

負けてねえよ。

ていうか、こんなこと考えてる場合じゃあない。

「おい、ルノーは？」

ルノーはまだバスの後ろには張り付いたままだ。

二発目が来ないとも限らないのだ。

「くそ、どうすれば　！」

キンジが顔を歪める。

神崎も俺も負傷。

おまけに今のキンジではどうしようもない。

だけど。

忘れてないか？

「おいおい、キンジ。人の嫁忘れんなよ」

橋にバスが入り。

瞬間。

『　私は一発の銃弾』

ぱあんぱあん。

突如、二発の弾丸がルノーの前輪タイヤを撃ち抜いた。

.....

「私は一発の銃弾」

へりの中でレキは言葉を紡いでいた。

ドアは開かれ、立ち膝の姿勢でドラグノフを構えている。

「全てを撃ち抜く一発の魔弾」

スコープの中には負傷した那須蒼一が見えた。

腕を負傷しているようだ。

拳士の彼にとっては精神的にもダメージが大きいだろう。後でちゃんと看病しようと思いつきながらも更に言葉を紡ぐ。

「瞳は照準、指は引き金、意志を劇鉄に」

愛銃を構える。

ドラグノフ狙撃銃。

射程距離は600メートルほどだがレキには関係ない。

何故ならレキの絶対半径は2051メートルだからだ。キリングレンジ

射程距離600メートルに絶対半径2051メートル。キリングレンジ

矛盾しているが していない。

実際にレキがドラグノフ狙撃銃で限界距離の標的を撃ち抜くのを那須蒼一を初めとした何人もが見ている。

それも針穴を通すような正確さ、でだ。

現時的にはありえない。

先に言っておけばレキは超偵、いわゆるステルス持ちではない。特別な能力も無く、しかしそれらを実現させる。

それはもはや異常だ。

それが彼女の持つ異常だ。アブノーマル

それが彼女の持つ異能だ。

スキル

武器が何であろうと、自らの絶対半径内の対象を100%撃ち抜く異常ー！

その名も。

「心を弾丸に

スナイプリンセス
『魔弾姫君』」

引き金を引いた。

ぱあん。

狙いはバスの下部に張り付いた爆弾。

それを撃つ。

爆発せぬように、接着部分のみを撃ち抜いて！

バスから外れ、道路を滑った所でもう一発。

ぱあん。

橋から落とし、川の中へ落とした。

着水、爆発。

水飛沫が上がり虹がかかる。

それを確認し、両足で立つ。

インカムに手を当て、

「何か言うことはありますか？」

『ありすぎて困るけどまず一つだ』

「なら、私も一言」

愛してるぜ、ハニー。

愛してます、ダーリン。

第9巻 「心を弾丸に

『魔弾姫君へスナイプリンセス』

byレキ(後

魔弾姫君は漢字だけなら(まだんきくん)と読んでね。

嫁レキは今流行りの異常^{アブノーマル}。

スキル等に意見お願いします。

発砲時の詩もアレで固定。

感想お待ちしてまーす。

次回も嫁レキの回。

第10巻「ああ。俺は今世界で一番幸せだ」by那須蒼一

「いやあ、今回はレキに救われたなあ」

「いえ、私は良いところ取りも良い所でした」

何言ってるかわかんねえよ。

俺は病室のベッドの上で上体を起こし、その横でイスに座るレキ。バスジャック事件の翌日。

俺、那須蒼一は絶賛入院中だった。

なにせ指は五本とも複雑骨折、腕から肩にかけての裂傷。右

腕は包帯とギプスに覆われている。

キンジは軽傷。

神崎は頭に被弾したが問題なし。

一応、念の為に同じ病院で入院中だ。

彼女はVIP用の個室らしいが。

俺は普通の個室。

扱いの差が、ひどい。

「それで、蒼一さん。怪我の具合はどうですか？」

「医者が言うには、普通なら2、3ヶ月はかかるとよ」

「……気を使える蒼一さんなら？」

「2週間」

「そうですね」

レキは一つ頷いて。
そして、何かに気づいたように。

「ああ、蒼一さん。少し待っててください」

そう言いつつレキは据え置き之机にあった果物の盛り合わせ
くーちゃんから貰ったらしい から林檎を手に取り、フルーツ
ナイフも握り、

「……………」

林檎を剥き出した。

「な……………に……………！」

レキが林檎を剥くだと……………！？

あのレキが！

食べ物関連はカロリーメイトのような栄養食品しか知らないレキ
が！

ここ最近ようやく普通の食事をするようになったレキが！
それでも、やっぱりカロリーメイトばかり食ってるあのレキが！

「れ、レキ……………？ 林檎なんて剥けるのか……………？」

「ええ、この前白雪さんに教えてもらいました」

手の動きを止めずにいった。

「……………な……………ん……………だ……………と……………！」

星伽から教えてもらっただと!?

あのレキが!

少し前まで風が風が言っていたレキが!

そのせいで友達がほとんどいないレキが!

くーちゃんや平賀くらいしか女友達がないレキが!

「……何か失礼な事考えてませんか?」

「いえ全く考えてないですよ」

「……ならいいですが」

そうしてしばらくして。

「出来ました」

小皿に切った林檎を乗せて差し出した。

正直に言えばきれいとは言い難い。

余分な果肉も皮と一緒に剥いたのか、大部サイズが小さいが、しかしだ。

「はい、あーんです」

レキが上目遣いでほんちよっぴり頬を赤く染めて差し出した林檎が!

おいしくないわけない!

レキが上目遣いでほんちよっぴり頬を赤く染めて差し出した林檎が!

大事な事だから二回言った!

「はあ……」

「4ヶ月前の約束を覚えてますか？」

4ヶ月前といえば。

そう、俺がレキを。

自らの主と定めた頃だ。

そして、その時。

それは。

「あのレキがやってみたいとかいって強制的にやらされた約束か」

「それはどうでもいいです」

「あ、はい」

「覚えてますね？」

「そりゃあなあ」

一つ、レキを守れ。

二つ、相手すらも守れ。

三つ、自分を守れ。

四つ、自分を守れ。

「主を守るのは当然、武偵であるがゆえに相手を殺さない。それに拳士最強であるために負けるな。そして、俺が俺であるために戦え、だろ」

「はい、私はそう言いましたね」

口で。

俺はレキと一緒に居続けるよ」

「蒼一さん……だれが正座を崩していいって言いました？」

「あ、スイマセン」

正座し直す。

レキは呆れたように首を振り、

「反省してますか？」

「はい」

「……証拠は？」

「何をすればいいでしょう？」

そうですね。

「とりあえず　私が心配した分だけ優しく抱きしめて、キスしてください」

「　よろしくです」

きゅん、きゅん。

第10巻「ああ。俺は今世界で一番幸せだ」by那須蒼一（後書き）

次回は少し開くかも。

感想お待ちしております。

12/8 微修正

第11巻 『兄弟』by那須蒼一&遠山キンジ(前書き)

アクセス600000越え。

ユニーク100000越えました。

これからもよろしくお願いします。

第11拳 『兄弟』 by 那須蒼一 & 遠山キンジ

風が強く吹く病院の屋上。

ずずー。

「……………」

ずずー。

「……………はあ」

さてさて。

缶コーヒーを飲みながら考えよう。

隣で情けない顔をしている親友をどうするかを。

……………

『性々働々《ヒステリアス》』。

それがキンジが抱えるアフノーマル異常だ。
命名俺。

キンジはヒステリアスモードと呼ぶ。

正式名称は『ヒステリアスモードH・S・S』という体質らしい。
実に単純なスキルだ。

『異性に興奮することによって驚異的な戦闘力を得る』。
もつともそれは結果であっても目的でない。

このスキルの目的は子孫を残す事にあるらしい。
つまり、スキル発動中は異性に好かれようとするのだ。
つまり、女性に対しどうしようもなくキザになるのだ。

……笑ってはいけない。
そのせいで中学時代にいろいろあつたらしい。
利用されたらしい。

便利にされたらしい。
道具のようにされたらしい。

あまり好きでは無かったと、当時のキンジは思っていたらしい。
それでも、いつか使いこなせると思っていたらしい。
ただ。

キンジが自らの異常を嫌悪したのは（今はともかく）彼の兄、遠
山金一死んだ時ということ。知っている。

.....

俺とレキが神崎の病室に行き、見たのは今にも泣きそうキンジの顔だった。

中の神崎はレキに任せ、俺とキンジは缶コーヒー片手に屋上へ来たのだ。

「.....アリアはさ、俺に期待してたんだよな」

キンジがぽつりと言った。

屋上の柵の手すりに身を預けながら。

「.....だろうな」

「でも、オレは何もできなかったか.....はは」

「.....」

「情けないな」

キンジは拳を手すりに叩きつけた。
怒っているのだ。

神崎にではない。

『武偵殺し』の犯人にではない。
自分にだ。

何もできなかった自分に怒っているのだ。
怒りに身を震わせているのだった。

それを見て俺は。
やれやれと思う。

暗いし根暗だし辛気くさいし面倒だし空気重いし鬱だし手痛いし
レキといちゃつきたいしなんか美味しい物でもって食いたいなあ。

そのためにはキンジがこんなままでは困る。
だから、声をかける。

決して キンジ心配だからではない。

「やっぱり武偵なんて止め」

「なあ、キンジ。神崎はお前に何を求めていたかわかるか？」

「え……？」

「だから、理由だよ。お前を奴隷にした理由」

「それは……武偵としてのアシストが必要だったからじゃないのか
……？」

「そんなわけないだろ、99回一発逮捕の失敗無しがどうして今更
武偵としてのアシストを必要とする？」

「あ……」

そう。

そこまでの実力があるのなら一人で十分だ。

奴隷など 必要ない。

一人でも問題ないはずだ。

それでも、奴隷をキンジを必要とするのは。

「武偵としてのお前を求めてるわけではないってことだろ」

「！」

無論、武偵としての強度は高ければ高いほど良いだろう。
けど、それは二の次だ。

神崎・H・アリアは天才だ。

それも、まだまだ成長する天才性だ。

そして、天才は孤独だ。

孤独であり 孤高でなければならない。

普通に紛れれば天才ではいらなくなるのだから。

だから、他人が解らない。

他人と分かり合えない。

他人に理解されないのだ。

そういう天才を俺は知っている。

そいつらの思いを俺は知らなかった。

天才たちだって、独りがいいわけがないのだ。

他人と解りたい。

他人と分かり合いたい。

他人を理解したい。

そう思っているのだ。

俺がそれに気づいたのはもう全てが遅かったけど。

「神崎は武偵遠山キンジ………を必要としてるわけじゃないはずだ。お前自身を必要としてるんだよ」

「

キンジは目を見開き聞き入っている。
どうして、こつも鈍いんだか。

「だからさ、勝手に諦める前にちゃんと神崎と話してこい。正直に、思った事を、溜め込んだことをさ。そうしねえと始まんねえよ」

俺は 出来なかったから。
キンジにはできてほしい。

「 そつか、なあ蒼一」

「 なんだよ」

「 すまんな」

は。

根暗の癖にいきなりイケメンにもどりやがった。

「気にすんなよ、あと武偵止めるとか言うな。4ヶ月前にお前がいなかったらさあ 俺もレキも死んでたぜ」

それに親友は放っておくわけにもいかない。

「つか、こついう時にあやまんなよ。
こついう時は。」

「ありがとな」

「気にすんなよ」

拳をぶつけ、

『兄弟』

こついうもんだろ？

第11拳 『兄弟』 by 那須蒼一 & 遠山キンジ (後書き)

前回嫁レキでニヤニヤしたら、今回は男の友情でニヤニヤ……できるかなあ？

もうすぐ武偵殺し編も終わるのでアンケートと取りたいと思います。

A、過去編

那須蒼一とレキの始まり。

蒼一が拳士最強になるまで。

無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。

基本原作通り。

但し、嫁レキ無双。

いちやつきイベントもたくさん。

どっちか意見お願いします。

第12「無傷で帰ってきたら続きをしてあげます」byレキ

「あー、暇だ」

神崎が退院して、数日後。

俺はものすごく暇だった。

レキは学校、キンジは顔すら出さない。

神崎とは上手くいっているのかも謎だ。

今の俺は大人しくアニメでも見るしかない。

「三発殴って倒せ、か……ううむ。かつけえなあ」

決め台詞か……。

最近全く使ってない。

ここ最近は何と……かといえば疑問だが言う機会は無かったなあ。

「ふあ、なんかないかね？ おもしろいこと」

電話がなった。

表示は 遠山キンジ。

ふむ。

「おう、どうした？ 白状者」

『蒼一！ 今何してる！？』

「ああ？ レキは学校だし、お前も全然見舞い来ないから一人でアニメ鑑賞だせ」

『……っ！ 無理を承知で頼みたいことがある！』

「いいぜ、何をすればいいんだ？」

『7時前までに羽田空港に来てくれ！』

「分かった。待ってる」

『……蒼一』

「ん？」

『……ありがとうな』

は。

「感謝しろ」

電話を切る。

時間は6時過ぎ。

走れば、間に合うだろう。

ベッドから出て、部屋に備え付けのクローゼットから防弾制服を取り出す。

着替えるが、

「……ネクタイは……」

右手が未だギブスに覆われているのでネクタイが結べない。
迷い、ノーネクタイで行こうかと思っ

「やりますよ」

レキが、いつの間にかいた。
ネクタイを手に取り、結んでくれる。

「……悪いな」

「いえ」

病室に布ずれの音が響いた。

「私もついて行きましょうか？」

彼女は行くのかと、問わないし何処へとも問わない。
まったく いい女だせ。

「んー、まあ大丈夫だろ、俺一人で」

「そうですか」

きゅっ、とネクタイが結び終わった。

「なら、ちゃんと帰ってきてくださいね 待ってますから」

「おう」

靴を履き、病室を出ようとして、

「あ、待ってください」

「ん？ どうし」

「ちゅう」

レキの唇と俺の唇が重なっていた。
十秒か二十秒そのまま。

「……ん」

離れた。

「無傷で帰ってきたら続きをします」

「……………おっ、行ってくる」

「はい、行ってらっしゃい」

レキを置いて病室を出る。
病院も出て、

「ふ、ふふふ」

ふふふふふ、ハハハハハハ。

さすがはレキだぜ。

さすが我が嫁！

「やる気にさせるのが上手いなあ！」

走った。

そりゃもう走った。

「わははははは!」

笑いまくりながら走った。

.....

そのあと空港にて、キンジと合流。

話を、聞けば神崎が英国に帰ろうとし、その飛行機に武偵殺しがハイジャックをしかけるらしい。

まず、感想は、

「お前、俺にあそこまで言わせて玉の興逃したのか!」

「そういう話じゃないだろ!」

叫び合いながら、飛行機に乗り込み、

「武偵だ！ 今すぐこの飛行機を止める！」

「お前がハイジャック犯か！」

そして、神崎と合流し人の事そっちのけで痴話喧嘩。

おまけに雷にビビった神崎をキンジが慰めだした辺り、あれ？
俺って必要？ なんて思いだした瞬間だった。

ばあん。

銃声が飛行機内に響いたのは。

第12「無傷で帰ってきたら続きをしてあげます」b yレキ（後書き）

アンケート引き続きやってまーす。

武偵殺し編後、どっちか意見ください。

A、過去編 那須蒼一とレキの始まり。 蒼一が拳士最強になるまで。 無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。 基本原作通り。 但し、嫁レキ無双。 いちやつきイベントもたくさん。

現在、A 4

B 3

このままだと過去編ですねー。

第13巻」

その落ちこぼれに負けて、

お前は超落ちこぼれになるんだ

12/14タイトル修正。

第13拳

その落ちこぼれに負けて、お前は超落ちこぼれになるんだよ

自分という存在を認めて欲しい。

それが峰理子の願いだった。

否、天下の大泥棒アルセーヌ・リュパンの曾孫。

理子・峰・リュパン4世の願いだった。

俺たちは銃声におびき寄せられて。それを知った。
聞いた。

彼女の聞くに耐えない話を。

彼女の語るに忍びない話を。

キンジ、神崎、峰たちの会話を。

それに俺は口を挟まなかった。

ただ、聞いていただけだ。

なぜならそれらの会話は、“受け継いだ者”の話だ。

だから このハイジャックに於いて俺が動いたのはその後だ。

神崎と峰のアルカタにより神崎が負傷し。

キンジが神崎を、連れて撤退。

応急処置の時間稼ぎに残ってからである。

.....

「俺はお前がうらやましいよ」

峰と対峙し、最初の言葉だった。

「ああ………?」

「だってさ、4世って呼ばれてることはご先祖様の後継者として認められてるって事じゃねえか」

俺にはそれがうらやましい。

俺は認めて貰えなかったから。

俺は 落ちこぼれだったから。

「どうせ、俺の事も知ってるだろ?」

キングの『性々働々《ヒステリアス》』も知っていたのだならば、

「 那須与一」

理子がある名前を口にした。
その名前に俺は口元を歪める。
自嘲の笑みだ。

「那須与一、それがお前の先祖だ」

「ご名答」

那須与一。

高校や中学の授業では、何度かであるであろう人物だ。

『平家物語』において遠く離れた扇の的を射抜いた弓の名手として。

源義経の家臣。

家系的に見れば俺の23代分前の人物だ。

「やっぱり知ってたか。なら俺が落ちこぼれである理由もわかるだろ
？」

「……正直信じられないな。まさしく小説やマンガの話じゃないか」

まあ、そう思うだろうな。

そうであったらどれだけ良かったか。
だが、

「現実だせ？」

俺が弓どころか銃とかの飛び道具が一つつも

使えないのは」

「まるで、呪いだ」

理子は吐き捨てるように言う。
まるで、ではなく。

俺にとってはまさしく呪いなのだ。

飛び道具が全く使えない。

弓に矢をつがえることができない。

つがえられても飛ばない。

飛んでも１メートルも飛ばない。

銃ならば、弾を込めれない。

込めようとするとこぼれ落ちる。

引き金を引けば不発。

最悪の場合は暴発。

弾詰まりは当たり前。

弓に銃だけではなく。

投げ槍も投石でもブーメランでも投げナイフでもダーツでも輪投げでもスーパールボールでも砲丸でも十字架でも巻き微志でも手裏剣でも苦無でもなんであるうと関係ない。

あまねく投擲物を俺は使えない。

そんな存在が 弓の名家である那須家で落ちこぼれ無いわけがない。

「それが 俺が落ちこぼれである所以だ。『那須与一24代目』を受け継げなかった理由だ」

最も　それだけ、という訳ではないが。
これに関しては言う気はない。

「なあ、蒼一」

初め峰から声をかけられた。

それまでの狂ったような声ではない。

「　お前はイ・ウーに來い」

「あ？」

「イ・ウーに來れば落ちこぼれじゃなくなるかもしれないぞ？」

「　」

きっとお前みたいな人間のためにああいう場所は在るべきなんだ、
と彼女は言う。

それに対し、俺は。

「そういうデートの誘いはキンジにしろよ」

俺はどこにも行かない。

俺の帰る場所は　どこでもない、レキのいる場所なのだから。
かつて　雨と血に塗れながら彼女と約束した。

どこでもない、お互いが共にいられる所にしよう。

そして　俺は構える。
構えるのは、

「虚刀流七の構え、『杜若』」

今にも駆け出しそうな動の構え。

右手は力を抜いておく。

飛行機の中では本気では戦えないから。

こんな所で本気でしたら誇張抜きで飛行機が壊れる。

そういう意味ではハイジャックというのは俺に対しては妙手だ。

「さあ、峰。悪いが時間稼ぎのつもりは無い。とっとお前を捕まえて帰りたいんでな」

なぜなら レキが待っているのだから。

「は。やって見ろよ、本気も出せず、タネの分かっている流派を使って何ができるのかを」

ああ。

知ってるよなあ。

コイツは結構なオタだし。

「見せてみるよ、落ちこぼれ！」

「その落ちこぼれに負けて、お前は超落ちこぼれになるんだよ！」

約4ヶ月ぶりの那須蒼一の決め台詞である。

そして、跳び出した。

第13巻

その落ちこぼれに負けて、お前は超落ちこぼれになるんだ

アンケート引き続きやってまーす。 武偵殺し編後、どっちか意見
ください。

A、過去編 那須蒼一とレキの始まり。 蒼一が拳士 最強になる
まで。 無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。 基本原作通り。 但し、嫁レキ無双。 いちゃつき
イベントもたくさん。

アンケートは、今週までくらいやる予定です。

巡クロでもアンケートやってるのでそっちもよろしくお願いします。

感想等待ってます！

第14巻「くふつ」by 埋子・峰・リュパン・4世（前書き）

まず、刀語の、ファンのみなさまへ。
当方土下座の用意あり。

カッとなってやった。
後悔はしていない。

第14巻「くふつ」by理子・峰・リュパン・4世

虚刀流。

虚しき刀の流れ。

刀を使わぬ剣法として、数多の技をもつ。

その中で奥義は九つ。

一の奥義『鏡花水月』。

二の奥義『花鳥風月』。

三の奥義『百花繚乱』。

四の奥義『柳緑花紅』。

五の奥義『飛花落葉』。

六の奥義『錦上添花』。

七の奥義『落花狼藉』。

最終奥義『七花八裂』。

その改良版『七花八裂・改』。

その九つの奥義が実際に作中で使われた奥義である。

それをもつて虚刀流は完了しているのだ。

.....

杜若の足裁きをもって機内を駆け抜ける。

向かう先は峰だ。

その顔には勝ち誇るような笑みを浮かべていた。いや、実際に勝利を確信しているのだろう。

なにせ、この狭い機内では俺は本気を出せない。

自身が編み出した奥義 『蒼の一撃シリーズ』はこんな場所では使えない。

発動の際にどれも強烈な震脚を必要とするからだ。

さらに足場を必要としない『天蒼行空』もだめだ。

あれは振りかぶった平手で、掴んだ風を対象にぶちまける奥義である。

こんな密閉空間でつかつたらどうなるかなんて考えたくもない。

第一右手が使えない以上半分が使えないのだ。

たがら虚刀流に頼らざるをえない。

だから、峰も笑っている。

虚刀流を知っているから。

だから 俺も笑った。

「虚刀流奥義！」

峰の懐に飛び込んでいく。

右の脇を通り抜けるように。

そして、一回転。

回りながら、体を傾ける。

右足を振り上げ、軸足の左は床を蹴る。

そして、その体勢でぶち込むのは右足だ。

宙に浮きながら、右足を大太刀に見立てた飛び込み回転袈裟蹴り！

「『快刀乱花』！」

虚刀流九の奥義、『快刀乱花』！

それに峰は何の反応も出来ずに左肩から右の脇腹へと直撃する！

「が、あああああああ！？」

峰の身体がぶっ飛ぶ。

だが、

「……髪でガードされたか。直撃のはずだったんだけどなあ」

神崎を戦闘不能にした自律する髪。

技名とかあるのだろうか。

……無かったら付けてみたいなあ。

「どういう、ことだ！」

機内を転がっていった峰が起き上がり叫ぶ。

信じられないものを見たように。

「そんな、そんな技は 虚刀流には無いはずだ！」

「ああ、無いよ。だって俺が考えたんだからな」

「……！」

おいおい、驚きすぎだろ。

「お前さ、オリジナル必殺技って考えたことないのかよ」

絶対と言っていていいだろう。

誰だっけ好きなマンガや小説にアニメで自分オリジナルの要素を入れたくなる。

それは最強の主人公だったり、

それは無敵の必殺技だったり、

それは可憐な女の子だったり、

誰だっけ考える。

俺は自分で奥義を作った。

刀を使わない剣法として。

「自作虚刀流奥義、全4種。まあ、あと3つは手技だから見せれないけどな」

もつとも 正確に言えばそれらは虚刀流ではない。

骨肉で伝わる流派である虚刀流において、俺自身は遣い手になれ
ても担い手にはなれない。

でも、まあ。

「言ったもん勝ちって話だよな」

「っ！」

峰は顔を歪める。

それでも、彼女の足は震えてのだけだ。

「さて、キンジたちを待つまでもないな。理子・峰・リュパン・4

世、殺人未遂やらその他諸々で逮捕させてもらっぜ」

そう言っつて、一步踏み出した瞬間だった。

峰が、僅かに笑った。

そして、

「なあ　　!?!」

床が大きく傾いた。

突然のことにより、姿勢が崩れる。

それでも、すぐに体勢を立て直す。

だが、遅かった。

「くふっ」

ぱあん。

僅かな隙に峰は銃を構え、発砲していた。

狙いは正確に俺の顔。

当たれば死ぬ。

だから　反射的に右手で弾いてしまった。

普段なら問題無かつただろう。

ただの拳銃の弾を弾くなんてのは朝飯前だ。

がしかし、今はダメだ。

なぜならば、先のバスジャックにより俺の右手は使えない。

それでも、反射的に使ってしまった。

死ぬことはなかったが、代わりに。

「あいたー！ー！」

思いつきり叫んだ。

というか叫ばずにはいられない。
めちやくちや痛え……。

「くふっ、形成逆転ってヤツだな。どうする？」

ぴーんち。

峰はかなりいい笑顔で、銃とナイフをちらつかせる。
輝いてるなあ。
どSだ。

「……どうするか、か」

脂汗が噴き出るのが分かる。

こんな状況でなかったら痛みに悶絶しているだろう。
……しかたねえ。

「俺も逃げるわ」

「くふっ？」

じゃ、と手を上げて。

後ろへと走りだした。

峰を置き去りにして。

有り体に言えば 逃走だった。

だって、ものすごく痛いからな？

.....

「あー、くそ。傷口が開いてんなコレ」

ひとまず峰が追ってこないことを確認して、廊下に座り込む。
脂汗は未だに止まらない。
くそぞう。

「これじゃあ、帰ってレキのご褒美が無しに……!!」

「やれやれ、相変わらずだな。蒼」

「!?!」

振り返ったそこにはキンジと神崎がいた。
だが、

「オイコラ、お前ら人が頑張ってる時になにしてたんだよ」

様子が明らかにおかしかった。

神崎は顔が真っ赤。

ブツブツとなにかを言っている。

そしてキンジはすでに『性々働々《ヒステリアス》』を発動していた。

それもなんというか、今までに無いヒスリ方だった。

もう滲み出るオーラが違った。

「ふ、悪いがそれは俺とアリアだけの秘密だ。な、アリア？」

「ふ、ふあい!？」

……もうキャラ崩壊してるぜ。

「さて、蒼一が頑張ってくれたんだ。俺たちも頑張らないとな。なに、大丈夫だよアリア、俺と君なら、ね」

キンジよ、今のお前はウインク禁止だ。

神崎が照れて使い物にならなくなるだろうが。

第14巻「くふっ」by理子・峰・リュパン・4世（後書き）

オリジナル変体刀はよく見るのに、オリジナル虚刀流ってあんまり見ないですね。

一度妄想したら止まらなくなってやってしまった。

アンケートはA4

B12

となっております。

これはもう、Bで決まりですかねえ。

なので、一応アンケートは明日の0時までとします。

皆さんは楽しみは最後までとっておく人が多いようですね。

武偵殺し編も後ちょっと。

12/16 追記。

アンケート終了しました。

詳細は次話で。

第15巻

「ご存じの通り、

『武偵殺しへワタクシ

」

は爆弾使いですか

「理子・峰・リュパン・4世…殺人未遂の現行犯で

」

「逮捕するわ！」

キンジと神崎が峰に銃を突きつけて宣言する。

なんとというか……。

相変わらず恙ないなあ。

そう思いながら俺はシャワールームから一連の出来事を覗いてい
た。

.....

キンジが立てた策はダブルブラフだった。

ベッドにいと見せかけて、

シャワールームにいと見せかけて、

どっちもブラフ。

ベッドは丸めた布団が。

シャワールームには俺がいた。

本命の神崎はキャビネットに。

シャワールームの人影に気を取られた峰に神崎が奇襲をかけてチ

エックメイト。

初めは大丈夫かと思ったが、上手くいった。

そのあたりはさすがと言った所だ。

しかし、俺はシャワールームから出ながら思う。

「キンジ、今の流れで峰がシャワールームに発砲したらどうするつもりだった？」

「……？ お前、拳銃の弾くらいで怪我するの？」

いやいやいやいや。

そりゃあ、気で防御しておけば直撃したって傷ひとつかないけど
よ。

なんか違うんじゃない？

「くふっ、お前は空気だったな。蒼一」

「うるせー！」

ちよつとだつて思つてないからな！

ホントだぞ！

ていうか、ここまで追いつめられていて酷い事言つてんじゃねえよ！

思つたその時、

「ぶわあーか」

峰の髪が蠢いた。

それをキンジが止めようとしたが 遅かつた。

「！」

床が大きく揺れた。

飛行機が急降下しているのだ。

全員の姿勢が大きく揺れた。

ただ一人を除いては。

「ばいばいきーん」

腹の立つ捨て台詞を残して行く峰は姿勢が乱れることなくしつかりと走っている。

俺の脳裏に先ほど峰を捕まえようとした瞬間のことがフラッシュバックする。

これは ！

「キンジ、あいつー！」

「ああ！ 髪にコントローラーが何かを仕込んでたんだ！」

いくらなんでも、あいつにはかり有利に揺れすぎだったのだ。
機体がどんどん高度を、下げていく。

俺とキングジは峰を追い、神崎はコックピットへ。

……いい加減、この追いかけてこにも飽きてきたぜ。

.....

峰は下の階のバーの窓に背中を押しつけて、立っていた。

否 待っていたのだ。

「狭い飛行機の中 どこへ行くつもりだ、仔リスちゃん？」

「は、こいつには女狐か女狸がいいだろ」

「くふっ、キンジ。近づかないほうがいいよー？ 蒼一はいいけど」

誰が行くか。

怪しさ爆発じゃねえか。

峰の背後の壁際、細い粘土状のものが貼り付けられていた。 まあ、十中八九爆弾

そして、峰はスカートの端をちよこんと摘み、軽くお辞儀して、

「ご存じの通り、『武偵殺し《ワタクシ》』は爆弾使いですか
ら」

それは、正直ムカつくくらい様になっていた。

「ねえ、キンジ。キンジもイ・ウーに來ない？ この世の天国にさ。なにより お兄さんもいるよ？」

「黙ってくよ、理子。これ以上に兄さんの話をされると俺は衝動的に武偵憲章第9条を破ってしまうだろう、俺にとっても君にとってもいいことではないだろう？」

それに、理子はからからと笑い、

「そっかー。それは困るなあー。じゃあ蒼一は？」

「あ？ さっきも言ったけどよお」

「遙歌ちよつかもいるよ？」

「は？」

「ちょっと待て。」

「何故。」

「どうして。」

「なんだって、今この場所で。」

「今更　　アイツの名前が出てくる？」

どうして 6年前にも死んだアイツが。

当時、十歳だった俺の唯一の家族。

たった一人の 妹。

那須家の最高傑作。

例外的な天才であるアイツの名が――！――！

「理子・峰・リュパン・4世――！――！」

俺は、衝動的に足を踏み出した。

踏み出さずにはいらなかった。

瞬間。

「安心しなよ。いつでも歓迎するからね？」

ドウツツツ！！！！

峰の背後が爆発。

出来上がった風穴に峰は自ら飛び込み、

俺は、

「あ」

なすすべもなく、空中に放り投げられた。

第15巻

ご存じの通り、

『武偵殺しへワタクシ』

は

爆弾使いですか

アンケート結果です。

A 4

B 13

でした。

というわけで、武偵殺し編の次は魔剣編をやります！

もともと、その前に何か番外編をやると思いますが。

どうしょっかなー？

武偵殺し編はあと多分2話。

俺の妹、那須遙歌について語る事はない。

いや、ないというよりも語りたくないと言っべきか。それこそ語るに忍びない話だから。

とりあえずは、身体的外見を述べてみよう。

肩まで伸ばした濡れ色の髪。

陶磁の如き白い肌。

兄である俺と対になるような紅い瞳。

日本人形のような少女。

否　美少女か。

もっとも、6年前の話だが。

彼女はたった一人の家族だった。

後にレキや握拳裂、キンジたち出会う前。

まだ俺が那須家本家に住んでいた頃の話だ。

もう6年も前の話だ。

そして　もう終わっているはずの話だった。

『ねえ、兄さん。安心してね、これで　』

彼女がなんて言ったかは思いだしたくもない。

.....

「ーっ！」

見えた！

走馬灯！

これが噂の走馬灯！

一瞬だけだけど！

我に返った瞬間、

「！」

全身に雨風が叩きつけられた。

身体が、バラバラになる錯覚を得る。

視界の隅で峰が制服からパラシユートを展開するのが見えた。
嵌められたら、訳ではない。

俺が勝手にじゃばって、勝手に落ちたのだ。

そして。

このまま落ちれば、死ぬ。

は。

さらにもっと距離が近づいていく。

走法 宙弾き《そらはじき》。

空間を弾いて、跳ぶ走法。

空中を走る歩法だ。

那須蒼一の奥の手の一つ。

無論、そう気安く使える技ではない。
なぜなら、

「ぐ、ぎい……！」

両足に激痛が走る。

空間を蹴って跳躍するという無理な動きに両足の筋肉が断裂して
いくのだ。

これで、2回。

まだ 届かない。

だから、もう1回。

「うおおおー！！」

バシン！

右足からブチブチという不吉な音が響いた。

それでも、空中を蹴りぬく。

視界の飛行機に開いた穴がすぐ近くに。

あともう少し！

手を伸ばした。

おもいつきり。

それでも 僅かに届かない。

それでも 手を伸ばした。

なぜなら。

「無事か 兄弟？」

「ああ、悪いな 兄弟」

頼れる親友が俺の手を掴んでくれると信じていたからだ。
最も、この時俺達に浮かんでいた笑みはすぐに消える。
なぜなら。

なぜならば、いきなり来たミサイルが飛行機の翼のエンジンを破壊したからだ。

.....

空中から這い上がってから数分後。
俺は一人で飛行機の最下層にいた。
右足を引きずりながら。

左足は何とか無事だった。

言っておくが独断行動ではない。

機内に引き上げられてから、俺もコックピットにいうとしたがキングジに言われたのだ。

正直、なぜかなんて解らない。

だから、聞いてみる。

「それで、キングジ。俺は何をすればいいんだ？」

『ああ、少し待ってくれ。今考えをまとめてる』

あ、そ。

携帯をスピーカーモードにして会話して、聞こえるキングジの声は実に冷静だ。

『性々働々《ヒステリアス》』様々だ。

『よし、まずは状況を説明する』

「おう、頼むぜ」

「いいか 現在ミサイルのせいによる燃料漏れのせいであと15分で燃料切れて政府にも見捨てられてどこにも緊急着陸できずにこのままいけばみんな死ぬしアリアを死なせたくないから武偵高の空き島に着陸するから」

「は、はあ!？」

めちやくちや大事なことを一気に言いやがった!

しかも、何気のにろけやがった!

いつかの仕返しか!

「それでだ、正直着陸に成功するかどうかかわかんないからさ」

ちよつとなんとかしてくれ。

「は」

どうかしてるぜ。

右手も左手も使えない俺にそんな事頼むなんて。

最も それに応えようとする俺もどうかしてる。

「委細承知」

拳士最強を魅せつけてやるう。

.....

さらに数分後。

飛行機は着陸に向けて高度を下げていく。

強いGがかかるが、来るとわかっていれば問題ない。
携帯からは、

『10、9、8、7、6』

キンジが着陸までのカウントをとっていた。

『5』

一息を大きく吐く。

『4』

無事な左足を大きく振り上げた。

『3』

左足が蒼く輝く気を纏う。

『2』

高速で滑る物体を止めるにはどうするか？

進行方向に別の物を置くか。

接してる部分の摩擦係数を大きく上げるか。

色々あるだろう。

『1』

そして 上から強い力を与えるという方法。

「蒼の一撃第五番」

『0』

「『支蒼滅裂』！」

着陸と同時に振り上げた左足を思い切り振り下ろす！
振り下ろした左足を中心に床に放射線状にひびが入る。
同時に今までとは段違いのGが襲う。

蒼の一撃第五番、『支蒼滅裂』。

いわゆる震脚だ。

否、いわゆる震脚だ。

振り下しと同時に生み出す衝撃波を相手与えるという奥義だ。
本来ならば複数の敵に囲まれた時用の奥義だ。
今、この場合では目的が違ったが。

震脚で狙ったのは上からの力で機体を止めようとしたわけだ。
下方向に強い力のベクトルを与えて減速させる。
そして、後は。

「止、ま、れえーーーーー！」

叫ぶだけだ。

叫んだ瞬間、

「!？」

横向きのGが強くなかった。

なんだあ!？」

そして、小窓から見えた。

飛行機の羽の部分に風力発電の風車の柱に激突するのを!

それによって機体がグルリと回るように滑る!

は、はははは!

まったく頼りになりすぎるぜ、兄弟!

そして激突の衝撃により機内を転がって。

機体が止まった事を確認して、

「……さすがに限界だ、ぜ」

気を失った。

第16巻

『支蒼滅裂』！ by 那須蒼一（後書き）

武偵殺し編は次で終わり。

感想待っています。

第17巻 「 恋人同士がキスする分には関係ありませんよね?」 b y l e k i

P V 1 1 0 0 0 0 越え、ユニーク20000越えました!

ありがとうございます!

ついでに総合評価も1000越え、これからもよろしくお願いします!
す!

第17巻 「 恋人同士がキスする分には関係ありませんよね?」 b yレキ

後日談というか 今回のオチ。

まず、何から話すかというと言つとやはりハイジャック事件についてのことだろう。

乗客には目立った怪我は無し。

空き島に緊急着陸した飛行機は現在解体中だ。

空き島自体は風力発電の風車が一本ひん曲がってるという、美観的には非常に残念なことになっている。

そして、犯人ついて。

結局峰・理子・リュパン・4世は逃亡。

足取りは掴めなかった。

と言つか、生死すら不明だ。

いくら高度を下げてパラシュートを使ったとされていたとはいえ、丸裸同然で飛行機から飛び降りたのだ。

それでも、間違はなく生きているだろう。

俺もキンジも神崎もそう信じている。

ああいうやつは生き汚いと、相場が決まっている。

それから、遠山キンジと神崎・H・アリアについて。

この二人についての顛末は正直俺はあまりよく知らない。

ただ、結局神崎は日本に残ったことは知っている。
わざわざ俺の所に来て、二人でそう報告してきたからだ。
それを、まるで友人への結婚報告のようだと思ったことは秘密だ。

そして俺、那須蒼一の話。

ハイジャック事件の2日後、目が覚めて待っていたのは 説
教地獄だった。

まず、病院の看護士さんに怒られ、医者に叱られ、アンビュラス救護科の知り
あいからは呆れられた。

右手は傷口が開いてさらに悪化。

右足は二度の宙弾きにより重度の筋肉断裂。

左足は右足よりもまじだが、『支蒼滅裂』による負担でやっぱり
重度の筋肉断裂だった。

全治3ヶ月。

俺でもってもう3週間はかかる大怪我である。

不覚 といえば不覚だった。

というよりも 平和ボケしていたのであろう。

思えば4ヶ月前の戦いを越えて、拳士最強を襲名してから初めて
の事件だったのだから。

.....

「聞いた話によれば古巣に帰ろうとしたアリアさんを絶叫キンジさんが引き止めて、ロンドンの武偵の方々から逃げるために女子寮の屋上からヒッターダイブかつこBGM宣言つきかつこ閉じるで文字通り逃避行したらしいです」

「ふうん。結局ハッピーエンドってどこか？」

「概ね、そういうことでいいんじゃないしょうか」

ハイジャック事件の3日後。

俺は病室でレキに例の2人のことを聞いていた。

俺はベッドで上体を起こし、レキは隣で椅子に座って。

あいつら、神崎が日本に残ると来ても詳細は言わなかったからだ。

「蒼一さんは気づいていたんですか？」

「まあな、最も恋人とかそういう関係を望んでいると思ったんだけど……パートナー、で終わってるもんなあ」

そう、あの2人はもうしばらくパーティーを組んでいくらしいがあくまでパートナーという関係らしい。

……本人達的には。

「まあ、そこらへんの話は本人達次第にだなあ……」

「それしかないでしょうね」

そうだなあ。

それ以外にできることは、

「面白おかしく弄るしかないか……」

「ナチュラル外道発言はやめましょう」

はいはい。

キンジも身を固める時が来たと思ったんだけどなあ。
しかし、まあ。

これでこの武偵殺しに関する事件はこれで終わりか。
まったくいろいろ大変だったぜ。

……

……

「……………」

「……………ん？」

ちょっと待て。

なんか忘れてね？

「……………なあ、レキ？」

「はい？」

「……………」
「褒美とやらはどうなった？」

「無しに決まってるでしょ」

「……………」

「無傷で帰って来たら、という話しでしたよね？ それなのにそんな大怪我をして。無しに決まってるでしょう」

「……………はい」

「では、私はこれからくーちゃんに新しいアニソンCDを借りる約束があるので失礼します」

「……………はい……………」

そうして、彼女は病室を出て行った。

「嗚呼……………鬱だ……………」

怒ってるかなあ……………。
失望してるかなあ……………。
がっかりしてるかなあ……………。
と。俺が落ち込んでいたら、

「忘れものをしました」

レキが戻ってきた。

まさか……………追い討ち!?

俺が戦慄していたら、

「お帰りなさい。蒼一さん」

ちゅう。

俺の唇とレキの唇が重なった。

……………!?

それは数秒続き、離れた。

「……………レ、レキさん？ ご褒美は無しじゃなかったんですか？」

「ええ、無しですよ」

ですが、と仄かにはにかんで。
わずかに首を傾げて、

「恋人同士がキスするの分には関係ありませんよね？」

では、と言って彼女は出て行った。

「……………」

……………どうしようか。

にやけが、止まらない。

俺は彼女に一生勝てないのではないかと、ふと思っ。

惚れた弱みとは よく言ったものだ。

まさしく、その通り。

とりあえず、急上昇したテンションをどうするか。

……………そうだな、うん。

とりあえずキンジと神崎を弄ろっ。

キンジは言うに及ばず、神崎も恋愛事には弱いだろう。

それなら面白いはずだ。

それはきつとキンジだけのよりも面白いはずだ。

なぜなら 1人よりも2人の方がいいに決まってるんだから。

第17巻

「

恋人同士がキスする分には関係ありませんよね？」

byレキ

次回！

海人さんとのコラボです！

第壹拳「『千本の刀へサウザンドソード』 東城一真」bY東城一真（前書き）

海人さんとのコラボです！

ちなみに時系列気にしないでください。

第壹拳「『千本の刀へサウザンドソード』 東城一真」by東城一真

某年某日某曜日　では話が進まないから日曜日。

「えーと、あんたが拳士最強の那須蒼一？」

一人で秋葉原に繰り出していたらそう声をかけられた。黒髪で年は俺と同じくらいで、首に青い水晶のアクセ。

そして、目を引くのは真っ赤な瞳と額の傷。

俺と同じ武偵高の制服だが……誰？

見覚えは、ない。

そいつは、いきなり。

本当にいきなりを

「　ちよっくら俺と勝負しようぜ？」

「……はあ？」

.....

所変わって、武偵高のグラウンド。
日曜日だから、人気はない。
いるのは2人。

俺、『拳士最強』那須蒼一。
その俺の正面にいるのは先程の少年。
腰に日本刀。
名前は……まだ聞いてなかった。

「そっいや、お前名前は？」

「東城一真ってんだ、よろしくな！」

テンション高え……。
思いながらも一応構える。

虚刀流、一の構え『鈴蘭』。

……いや、なんで戦う事にしてるんだ？
そう思う間に東城は、

「霊刀、『鬼切』！」

鞘から漆黒の刀を抜刀する。

「なん……だと……」

真っ黒い刀……。

「か、か」

「か？」

かけえなあ、おい。

漫画ではよくあるが実際にはなかなか見れない。

少なくとも、俺は見たの初めてだ。

「……いや、なんでもねえよ。さっさと始めようぜ？」

心を落ち着ける。

少年心という名の心を。

「なんだよ、いきなりやる気だな！」

お前に言われたくない。

やれやれ。

そして、

「『拳士最強』 那須蒼一」

「『千本の刀』 サブザンドソード 東城一真」

いびつ、尋常じゃ……。。

「勝負……！」

.....

まずは小手調レベルで攻撃を繰り返す。
拳を、貫手を、掌低をぶちまける。
それなりに、力を込めているが、

「当たんねえな！」

東城の言うとおりに当たらない。
見切られ、刀で凌がれる。

小手調べと言っても当たればそれだけで戦闘不能になるはずなん
だがなあ。

ならば、

「虚刀流、『石榴』から『菖蒲』まで打撃技混成接続！」

打撃技による連続技。

だが、それすらも、

「おおっと!?!」

よけられ、耐えられる。

あまつさえ、

「そんなもんかよ!?!」

反撃の突きが来た。

体重が乗せられた一突き。

そしてそれを 待っていた。

突き込まれる一刀を前に俺は東城に対して、左半身。

黒刀は俺の背中を皮一枚外して通過する。

そして、

「虚刀流、『菊』!」

左の二の腕と右の肘を使って背骨を支点にし。

俺は黒刀をがっちり固定した。

「な……!」

「に……!?!」

驚きの声は2つ分。

己の突きを避けられ、固定された東城。

刀折り《……》の技を使ったにもかかわらず、折ることをできなかつた俺。

さらに、そんな俺に目を丸くする東城。

動いたのは 同時だった。

俺は固定するのに使っていた右肘をそのまま手刀として繰り出す。それでも、やはり東城は刀で受ける。

続けざまに足刀や手刀を繰り出す、それらも受けられる。

打ち出した拳や足が30を越えたところで、一旦距離をとる。

固い、な。

防御がではなく刀そのものが。

虚刀流『菊』は梃子の原理で刀をへし折る技なんだけど、折れなかつた。

それはつまり、あの黒刀がかの刀剣最堅に匹敵する硬さを誇るわけではないはずだ。

俺の虚刀流はあくまでも真似だ。

見真似であり、

読真似なのだ。

だから、あの黒刀が絶対に折れない刀といわけではない、はずだ。……ないといいなあ。

「さすがは拳士最強、鬼切が折れるかと思つたぜ！」

「折れてないけどな」

それにしても、コイツテンション高い。

戦闘狂か？

まあ、それはともかく。

わかつたのは 俺程度の虚刀流の強度では足りないということ

だ。

コイツを。

このテンション高めの『千本の刀』サウザンドソード』東城一真を打倒するには。

それは。

それは

「おもしれえ」

初めて、俺の顔に笑みが浮かんだ。

それに東城が気づいた瞬間 動いた。

とんつ、という足音を残し。

東城の目と鼻の先へ。

俺はその東城の首もとに右手を添える。

攻撃ではなく、ただ触れただけだから反応できなかったんだろう。

それをそのまま、

「!?!」

首根っこを掴んで地面に叩きつけた。

そのまま 引き摺る。

「う、うおおおおおおお!?!」

20メートルくらい引き摺って。

跳んだ。

「蒼の一撃、第十一番」

東城の首を

「『蒼和雷同』！」

投げて、思い切り地面に叩きつける！

「！」

東城は地面に落ち、土煙が舞う。

蒼の一撃、第十一番『蒼和雷同』。

相手の首根っこを掴んで、地面を引き摺って跳んで、さらに投げ飛ばして地面に叩きつける奥義。

蒼の一撃シリーズにおいて、唯一の投げ技。

かなり、えげつない。

まあ、でも、

「これで終わ……」

り、という最後の言葉は言えなかった。

いや、別に俺が“り”と発音の仕方を知らなかったわけではない。

言えなかったのだ。

“り”を言う直前に、

「鎌鼬、風斬！」

という叫びと共に風の刃が土煙の中から飛来したからだ。

「う、うおっ！」

俺はそれを情けないことに、

恥ずかしいことに、

思い切り地面に倒れることで避ける。

そこで俺は気づいた。

さっき、終わりとか言おうとしたのは、

「フラグだったか……！」

「なにがだよ」

土煙から現れた東城は無傷だった。

いや正確にいえば、地面に引き摺った分の擦り傷や汚れ、頭から少し血を流しているがそれだけだ。

最後の決めの叩きつけの分の傷　　はない。

「どういうことだ……？」

そして、気づく。

東城の握っている刀がそれまでの黒刀から刀身の薄い緑色の刀に変わっているのを。

さらには風を全身に纏っているのを。

「そいつは」

「フッ！　そうだが、コイツは風を操る刀『鎌鼬』。今のは『旋風』って技だ！」

.....

後日談というか、その後にあつた事。

結局、その後3時間くらい戦い続けて、グラウンドを穴だらけにした。

その後2人揃って蘭豹に説教されたが。

それでも、別れ際に拳をぶつけ合いながら、互いの名前を呼び合つた事を明らかにしておくべきだろう。

さらにその後には本日秋葉原に繰り出したのはレキに新発売のCDを取りに頼まれていたのを思い出し、行ってなくてもものすごく焦つて顔を青ざめたのは.....

.....どうしようか。

第壹拳「『千本の刀へサウザンドソード』 東城一真」by東城一真（後書き）

こんな感じでしたが、どうでしょうか？

海人さんへ。

加筆修正したので何かあったらよろしくお願いします！

次回から魔剣編

プロローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」by神崎・ホームズ・アリ

魔剣編始まり始まり

ブローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」by神崎・ホームズ・アリ

「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」

「ハイタイムタイム、5分たったらまた入ってこい」

神崎・H・アリアは病室に來襲してとんでもないことを言った。
とりあえず部屋から追いだした。

「さて」

まずは携帯の電話帳からキンジのアドレスを出して、発信。
数コール置いて、

『蒼一か？ どうし』

「死ねロリコン」

電話を切った。

……………。

さて、どうするか。

とりあえずは現状把握。

武偵殺しの事件から数日後。

未だに俺は入院中だ。と言っても傷はそれなりに回復した。

日常生活にはさほど問題ないくらいに。

あと何日かで退院する予定だ。

今は病室に俺1人。

レキはまだ学校だ。

病室の外には神崎が。

つまり。

つまり

今この状況を俺1人で乗り越えなければならぬ。

「ふむ いいだろう」

遊んでふざけていじって弄んで楽しんでやんよ。

「入っていいぜ、神崎」

神崎、再登場。

彼女が何か言う前に、

「悪いが、俺はソレを教えるわけにはいかない」

「……なんでよ」

「いいか？ そういうことはキンジに教えてもらえ」

「そのキンジが教えてくれなかったから、ここに来てるのよ」

だろうな。

そんなことだろうと思った。

「ああ、だから教えてもらつ方法を教えてやるつ」

「……？」

神崎が首を傾げる。

「いいか？」

一度区切って、

「キンジの前で制服の胸元緩めて女の子座りして目を潤ませながら上目遣いで“教えて……キンジ……？”とでもいえば奇声を発しながら教えてくれるぜ」

「……………」

神崎は言われたことを理解できなかったようで、少し怪訝そうに首を傾げ、

「……………！ な、なに言ってるのよ！ この変態！ 風穴開けるわよ！」

「落ち着け、いいか。これは変態的なことじゃあない むしろ神聖なことだ」

「どごがよー！」

「わからないか？ 子供ができることは神聖なことで嬉しいことだ。ならばそのための手段を問うこともまた 神聖なことだ」

「は、はあ？」

「そうすなわち生命の神秘！ だから神崎、気合いを入れて聞いて来い」

「い、いいのかしら……………」

「いいんだよ。お前シャーロック・ホームズの子孫なんだから？ そのお前がそんな誰でも知っていることを知らなくていいのか？」

「……！ い、いい訳ないでしょう！」

“誰でも”の部分に過剰に反応した。

……ちよろいな。

「あたしは神崎・ホームズ・アリア・よ！ その名にかけて聞いた来るわよ！ 今すぐ！」

単純だ……。

というより簡単だ。

やっぱりちよろい。

大丈夫かホームズ家？

神崎は脚を踏み鳴らしながらドアに手をかけて、病室に出る前に。

「ああ、蒼一。いいかげんあたしのことアリアって呼びなさいよ。よそよそしいわね」

「……考えておくよ」

出ていった。

……

なんか、変なところでカッコイイヤツだな。

まあ、それはともかく。

「く。どうなるか楽しみだなあ」

「なにがですか？」

「うおっ！？」

いきなりレキがいた。
いつの間だ。

「レ、レキ？ いつ来たんだ？」

「今です。アリアさんとすれ違いましたがなにかあったんですか？」

「あ、ああ。ちょっと質問されてな……」

「そうですね。ところで見て欲しいのことがあるのですが」

「ん、なんだ？」

レキは制服の胸元を緩め。

床に女の子座りした。

目を潤ませながら上目遣いで、

「教えて、ください……蒼一さん」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「ちえりおー！」

奇声を上げてしまった。

プロローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」 by 神崎・ホームズ・アリ
必殺、章変え！
続きません。

緋弾のARIA 11巻の表紙を見て決めた！

番外編で嫁理子やるぜ！
そのうちだけど！

感想待ってまーす。

第1巻 「俺のベッドなら2人で寝れるぜ」 by 那須蒼一

「それでキンちゃんに付く悪い虫を殺すにはどうしたらいいと思う？」

「アドバイスの前に言っておくが、殺すな」

昼休み。

久しぶりに学校に復帰してとんでもないことをスゴいい笑顔で聞かれた。

相手は星伽白雪。横にはレキが。

教室にて3人で星伽が作ってきた重箱弁当を摘んでいる。

うまい。

星伽から持ちかけられたら相談は、キンジに付く悪い虫〓神崎をどうするかというモノだった。

ちなみに相談料はこの弁当。

「い、いやだなあ、那須くん。言葉の綾だよ、あや。ほら、私って綾取りもできるし」

そんな設定は知らない。

「ていうか、綾取りでも人殺せますよね」

「レキ、そこに触れたらダメだ」

おほん。

「よし、星伽。キンジにつく悪い虫の取り除き方だったな」

「うん！」

だから、その怖い笑顔を止めろ。
背筋が、凍る。

「ふむ」

顎に手を当てて考える。

つまり神崎をどうやってキンジから遠ざけるか、ということだ。

……ふむ。

「無理じゃね？」

「……？」

「いや、何でもない」

どうしようか。

正直言って神崎をキンジから遠ざけるのは無理だ。
無理ゲーだ。

隣のレキを見る。

神崎の唯一の友達といえる彼女ならば、なんとか

「……………」

「！」

コ、コイツ！

目を閉じて音楽に集中してやがる！

いや、よく考えれば友達がない神崎をレキが売るとも思えないか。

星伽とも最近仲がいいようだから不干涉を貫くのか。
ぬ、ぬぬぬぬ。

どうするべきか。

少なくともこの昼飯分は何か案を出さなければ。

うーん。

うーん。

うー、あ。

「逆に考えて見ようぜ星伽」

「逆………？」

「そう、逆だ。キンジから悪い虫を取り除くんじゃなくて、お前がキンジを引きつけるんだ」

「………！」

バーンと星伽の頭に衝撃が走った……… ように見える。

「神崎の行動を防ぐのは至難だ、だから！ お前が！ キンジを引きつけ 否、惹きつけるんだ！」

「な、なるほどー！」

そうだな、具体的には……… うん。
これだ。

兼ねてからの俺自身の野望の為にも。

「星伽、どうにかしてキンジの部屋に転がりこめ。俺は気にしないから」

「え、えええ!?!」

「ブーン、と星伽の頭に戦慄が走った……気がする。

「キ、キンちゃんどど、どどどど同棲!?!」

「そっだ、同棲だ」

「キンちゃんと24時間一緒!?!」

「ああ、24時間一緒」

「キ、キキキキキ」

「キ?」

「キヤーーーーー!」

あ、鼻血吹いてぶっ倒れた。
机を回り込んで見てみれば、

「えへ、えへ、えへへへへ」

「怖っ」

「とうか、キモい。」

大和撫子が売りの星伽がするような顔じゃあない。
とりあえず。

「おい、だれか保健室に運んでくれ」

クラスの保健係に星伽を任せておく。

俺は、

「さて、飯飯」

星伽のことはともかく、飯に集中しよう。

箸を伸ばして　カチャリ。

……カチャリ？

「蒼一さん」

見れば。

横を見れば。

レキがライフルを俺の頭に突きつけていた。

……おいおい。

「蒼一さん、今の話はどついついことですか？」

「ど、どついついこと、とは……？」

聞きだいののはこつちだ。

「星伽さんとキンジさんの同棲をすすめるとはどついついことですか？」
か？」

「い、いや俺はただ親友の恋路を思ってたな」

「そんなことはどうでもいいです」

い、言い切った！

「半年前はあれだけ同棲はダメとか言っていた人の案とは思えませ
んね」

い、いつの話を……。

でもまあ、つまり。

これは所謂 嫉妬か。

やきもち。

かわいいなあ。

「まあ、まあ。だからさ」

「だから？ 頭を打ち抜いてください、です……」

「お前もウチに来いよ」

「！」

レキの琥珀の目が、見開かれる。

「あの部屋にお前一人で置いておくのはどうかと思うしなあ」

レキの部屋。

置いてあるのは、栄養食品、漫画、ラノベ、DVD、弾薬のみだ。
不健康すぎる。

「……いいんですか？」

レキの瞳が僅かに揺れる。

「応」

「……………では」

間は短かった。

こちらを見つめて、頭を下げて、

「不束者ですが、よろしくお願いします」

「 応」

言葉と共にライフルが下りる。

ふう。

胸をなで下ろす。

「着替えとかはともかく、寝床はどうしましょう？ 白雪さん来ますよね？」

「ああ、それなら問題ない」
なぜなら。

「 俺のベッドなら2人で寝れるぜ」

そうじゃねえだろ！、というツッコミが周囲から入った。

第1巻 「俺のベッドなら2人で寝れるぜ」 by 那須蒼一（後書き）

とりあえず、白雪に乗っかって嫁レキも同棲。

まあこの時点では白雪がキンジと同棲するかは決まっていんですが。

第2巻「4ヶ月前、アタシや蘭豹を足蹴にしてくれたのは覚えてるー?」「b y 録
あけましておめでとういっせよませ。

第2巻「4ヶ月前、アタシや蘭豹を足蹴にしてくれたのは覚えてるー?」b y 優

『生徒呼出 2年B組超能力捜査研究科 星伽 白雪』

「ついに殺ったか……。昨日のアドバイスは無駄になってしまったなあ……」

「やはり差し入れカツ井ですかね」

「人の幼なじみを犯罪者扱いするな、この外道夫婦」

「^{マスタイズ}教務科に侵入するわよ！」

『え……?』

.....

マスターズ
教務科。

ジャンク
地下倉庫、

アサルト

強襲科に並ぶ武偵高三大危険地帯である。

マスターズ

教務科には元殺し屋、元マフィア、元特殊部隊、元傭兵など聞きたくもないが聞き慣れているといえれば聞き慣れている職業ばかりだ。

だから。

マスターズ

教務科に好んで潜入する生徒など皆無だ。

もしいるとしたらソイツはピンク色馬鹿が自殺志願者だろう。
なにより。

4ヶ月前の事件においてちょっととした問題を起こした俺からすれば 絶対に行きたく場所である。

.....

それなのに俺はマスターズ教務科のダクトを匍匐前進で進んでいた。
なぜ。

いや、理由は分かっている。

キングを挟んだ一つ前に進む、身体的理由でやたら匍匐前進が早いピンク色馬鹿のせいだ。

「すっ！」

「なにすんだ！」

「なんか変なこと考えたでしょう！」

「なんの話だ！」

……なんの話だろうね。
知りません。

「お前らいちやついてないで進めよ」

「いや、ここは戻ったほうがいいと思いますが……」

全くもって同感だ。

後ろにいるレキに気配だけで同意する。

……自分で思っていてよくわからない表現だなあ。

因みに俺たちの並び順は神崎、キング、俺、レキだ。

しばらく進む。

戻らずに進んで 見つけた。

個室に彼女はいた。

だから、狭いダクトで男女に別れて下を覗き込む。

狭え……。

暑苦しい……。

レキと変わってくれ。

キンジはキンジで目の前の神崎を意識して赤くなっている。

くそう。

なら俺もレキを見る。

「じー」

「……………?」

視線を送ったら、こちらに気づいて首を軽く傾げる。

ああ、かわいいなあ。

……………

デュランダル
魔剣。

『ローランの歌』というフランス叙事詩に登場する英雄ローランの剣であり。

その金の柄の中には聖ペテロの歯、バシリウスの血、パリ市の守護聖人であるディオニュシウス^{ウスの毛髪}、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められた剣であり。

絶対不落の切れ味と絶対不落の硬度を誇る剣であり。

アニメや漫画に引つ張りだこの剣であり。

角笛と共にありし聖剣 ではない。

この場合指すのは誘拐魔の事だ。

誘拐犯と聖剣、酷い落差だ。

聖剣堕ちて魔剣ゆづかいまということだろうか。

洒落にもならない。

センスを疑うぜ。

本物を持っている訳ではあるまい。

もし本物があったらそれこそトリプルアクセル土下座でもしてやる。
まじ。

そんなことはともかく
閑話休題。

超偵ばかりを狙う誘拐魔らしい。

らしい、というのは魔剣デュランダルは所詮都市伝説だからだ。

都市伝説。

噂話程度であり、結局は存在しないのだ。

その存在しない魔剣が星伽キユラにちよっかいかける可能性があるか尋ダ

問科教師の綴が注意を促していた。

ボディガードをつけるということだ。
なるほど。

超能力捜査研究科《SSR》のエースである星伽に対する過保護だ。

もうすぐアドシールドもあるから心配なのだろう。

そう、俺が納得した所で、

がちゃり！

神崎がパンチで通風口のカバーをぶち開けた。

「ええー……」

「ちよっ……！ おまッ……！」

「おやおや」

俺たちを置き去りにしてパンチラしながら室内に降り立った。

「そのボディガード、あたしがやるわ！」

誰もが目を丸くし、キンジなんかは驚きの余り身を乗り出してたから少し押してやったならそのまま落ちた。

神崎の上に落ちた。

さらにいちやつきだした。

なんじゃこりゃ。

オマケにその後綴に個人情報漏洩されているし。

「強襲科アサルトの期待の最優エースなのにおよ……」

「わあー!」

神崎泳げないんだ。

キンジなんかはほくそ笑んでる。

「それで、こっちは強襲科アサルトの王様キング、遠山キンジくん」

矛先がキンジに移り、

「一年の時はSランクだったのに4ヶ月前の一連の事件……のせいで年末のランク査定で欠席、予備日も入院して結局Eランクになった
大マヌケ」

「うぐ」

キンジが絶句している。

「それで、その原因になった2人は」

綴が懐から拳銃を取り出し天井に向けて、

「ん？」

発砲した。

「お、おおっ!？」

上手く俺がいた所だけを狙ってきた。
とっさに転がり落ちる。

無様に転がり落ちる。

いや、でも何発か当たったよ。

なんて教師だ。

地面に音を立てて落ちて、すぐ後のレキは音もなく降り立つ。

なんだ、この差。

「狙撃科スナイプの最優エースレキちゃんに、あー、強襲科アサルトの……うん、切り札ジョーカー、
『拳士最強』那須蒼一じゃあないかー」

「ど、どうも」

軽く手を上げて、挨拶。

にっこりスマイル。

綴もスマイル。

「4ヶ月前、アタシや蘭豹を足蹴にしてくれたのは覚えてるー
?」

「うぐ」

思い出したくもない。

4ヶ月前 あの時不覚と覚悟のくそつたれな2ヶ月間の終幕頃
の話だ。

今では思い出すたびに悪寒が走る。
授業で蘭豹の前にでる時も同じだ。

「まあ、いいや。それでーハイジャックカップルにバカップルはどうしてここにいるのー?」

「言ったとおりよ。白雪のボディガード、24時間体制、あたしが無償で引き受けるわ」

「……星伽。なんか知らないけど、Sランクの武偵が無料口八で護衛してくれるらしいよ」

綴が振り返って星伽を見れば、

「い、いやです！アリアがいつも一緒だなんて、けがらわしい！」

けがらわしいって。

ひどいな。

どうすんだよ。

と、そこで何故か神崎が太もものホルスターに手を伸ばした所で、

「ならばいい考えが、あります」

全員の動きが止まる。

視線が我が嫁レキに集まる。

彼女は右の人差し指を立てて。

「こんなのはどうでしょう? ここにいる皆で白雪さんを護衛しては。白雪さんはアリアさんと24時間一緒ではないですし、アリアさんも白雪さんの護衛ができます」

すらすらとレキは言葉を紡ぐ。

おいおい、初期の無口キャラはどうした。

影も形もないじゃないか。

「とういうわけで　白雪さんとアリアさんとキンジさんは同棲しましょう」

えーと、その3人が同棲するということとはつまり、

「　私も蒼一さんと同棲するつもりでしたので」

レキ。

あまり教師の前で同棲同棲連呼するな。

番外編予告 負物語

時計の針を巻き戻そう。

小刻みに。

6回に分けて。

あの理不尽と覚悟にまみれたくそつたれな2ヶ月間
それより
さらに前。

那須蒼一が魔弾の姫君レキに会えてない頃。

那須蒼一が『拳士最強』じゃあ無かった頃。

那須蒼一が何も願いを持っていなかった頃。

那須蒼一が誰も護りたいと思わなかった頃。

那須蒼一が弱さの強さに気付いていない頃。

那須蒼一が誰も彼もを信じられなかった頃。

那須蒼一が優しさを甘さだと思っていた頃。

那須蒼一が自分の為に生きていなかった頃。

彼らに出会った。

10歳から15歳の誕生日にかけて彼らに出会った。

自らを書き換えながら、月を望む篝火を追う者。

傷つけることを放棄し、護る事に特化した翡翠色の司書。

弱さと痛みを内包し、強くあろうとし強くあり続ける飄々とした
黒の剣士。

全てを吹き飛ばして、全てを巻き込む嵐の王。

理外において理内の悉くを断ち切り殺す、優しき暗殺者。

一本の刀でありながら、自分の為だけに生きる完了された大男。

彼らは強くて弱くて　そして強かった。

これから語るのは敗戦記だ。

俺の負け戦の話だ。

負けて負けて負けて負けて、得たもの話だ。

俺の憧れた人たちの話だ。

どうしようもなかった俺に色々なことを教えてくれた人たちだ。

過去を引きずり今を生きていかなかった俺に現実を見せてくれた人たち。

誰かに恋して、誰かを愛して、誰かと共にある人たち。

さあ、前置きをこれくらいにしてそろそろ始めよう。

長くなる話だ、いや、実際はそれほど長くはないけれど俺が長く語りたいのだ。

今の俺が俺である切欠を作ったくれた人たちとの話なのだから。

さっきも言ったけれど、これは負け話だ。

レキヤキンジあたりには聞かせられない格好悪い話なのだ。

それでも、俺は胸を張って、誇らしげに語るう。

この 負けっぱなし物語を。

番外編予告 負物語（後書き）

とりあえずPV50000ごとに投稿するつもりです。

今170000なので一話目まであと30000。

来年には終わってるといいなあ。

嫁理子は魔剣編終わったらね。

基本、作者の好きな作品の主人公を出します。

全六話予定。

第3巻「やっぱりかー！」「b 遠山キンジ（前書き）

真面目なお話。
独自設定です。

第3巻「やっぱりかーーーー！」by遠山キンジ

「結局さ、^{デュランダル}魔剣は本当にいると思うか？」

ふと、タンスを運びながらキンジが言った。

「さあ？」

俺は手ぶらで答える。

^{マスターズ}教務科に潜入した翌日、俺たちは星伽とレキの引越中だった。と言つてもレキの荷物は自家製の弾丸だけだったので（生活に必要な物は元々俺たちの部屋にあった）、ほとんどは星伽の荷物だ。だからこそキンジ一人で運ばせているのだが。

「さあつて、なんかないのかよ」

「んなこと言われてもなあ。正直、わからん」

都市伝説と言われているのだ。
なにが真実でなにが虚構か判断がつかない。
わかっているのは一つだけ。

「超偵専門の誘拐魔、もし本当にいるとしたら何を考えてるんだか」

「俺は^{ステルス}超能力事態がよくわからんのだが」

「今時お前そんなんでよく武偵やってられるなあ。だからお前無恥ロリコンなんて呼ばれてるんだぜ」

「待てこら」

「ん？」

「ん、じゃねえよ。まさかとは思うが最近所々で囁かれていたその2つ名は」

「おう、俺が考えたんだ」

「やっぱりかー！ー！」

ダンスを投げつけてきた。
危ないわ！

「なにすんだ！」

「うるせえ！ ふざけた名前つけやがって！」

「事実じゃねえか！ このロリコンバカ！」

「お前だっかわんねえじゃねえか！ 無口バカ！」

「てめえ人の嫁に色目つかってんじゃねえよ！ ツンデレバカ！」

「変な誤解すんな！ アリアと白雪に聞かれたらどうすんだ！ 似非クールバカ！」

「誰が似非だ！ 根暗ハーレムバカ！」

「ぐぐるるるるー！」

「がるるるらる!」

俺たちは唸りを上げ、

「この桜吹雪、散らせるものなら散らせてみやがれ!」

「ただしお前は俺に負けて超落ちこぼれになるけどなあ!」

決めセリフと共に飛びかかった。

.....

「^{ステルス}超能力つてのはお前やレキみたいな『異常≪アブノーマル』とは根本から異なるんだよ」

全身ボロボロになりながらキンジと共にぶちまけられたタンスの中身を片づける。

およそ五分間に渡り繰り広げられた戦争については是非とも語りに語りたい所だが、文字数にして10000文字は必要なのでここでは割愛しよう。

「だから、どう違うんだ？」

「そつだなあ……、『^{ステルス}超能力』つてのは性能で、『^{アブノーマル}異常』つてのは性質なんだよ」

「あ……?」

なんとさえばいいのだろうか。

俺も受け売りでしかないんだが。

「^{ステルス}超能力はさ、遺伝で発現する場合が多いらしい。血肉によって伝わる異能。遺伝子の螺旋が繋ぐ人間の第2の出力」

人の出力器官は一つだけ、筋肉だ。

人の動きは筋肉の動きだ。

筋肉。

普通の活動はもちろん、表情は顔の筋肉の動き、声は声帯の動きでしかない。

人は筋肉の動きをもってしか世界に働きかけを出来ないのだ。

「だからこそその人を越えた性能、能力　超能力だ。言ってみれば、ニューカマーだな」

「それは……なんか違うんじゃないか？」

まあ、いいじゃないか。

「で、お前みたいなのは『異常』って血で遺伝するわけじゃない。しないわけじゃないけどな」

「ああ、俺のは遺伝だろう」

確かに、キングの『性々働々《ヒステリアス》』は遺伝しているけど。

「^{アブノーマル}異常』はな、魂の発露なんだ。人の根源が異能として具現化する」

根源。

その人の基となるもの。

その人を構成するもの。

それらはどうしようもない。

どうしようもなく、どうにもできない。

ステルス超能力のように第2の出力としての意味はない。

「ただ、そういうものでしかない。だから正直こうやって解説しても意味はない」

語るに足らず。

語るうにも 語れない。

『ステルス超能力』はそれこそ超能力捜査研究科《SSR》にでも駆け込めば詳しく教えてくれるだろう。

でも、『アブノーマル異常』は わからない。

異能としての説明はできても、存在証明は出来ない。
存在証明。

自己存在の理由を、説明なんて 誰にもできない。

自分のことなら尚更だ。

「……やっぱり、わけわからん」

キンジは頭を横に振る。

痛そうに。

まあ、頭の痛くなる話だ。

「俺にもよくわかんねえよ。これだけ言っても異能としては対して
区別がつかないんだからな」

「なんだそれ」

互いに苦笑。

「やれやれ、なんでこんな話になったんだ？
ないかの話だったろ」

確か魔剣デュランダルがいるかい

「お前が超能力なんだったけとか言うからだ」

「悪かったな」

「土下座したら許してやるよ」

「言ってる」

は。

さて。

さてさてさてさて。

とりあえず話に一区切りついたわけだが。

ここでさらに頭の痛くなる問題が発生した。

キンジと共に頭を抱える。

さあ、どうしよう。

この散らばった 星伽の下着はどうしよう。

ていうか、この黒いのは拙いだろ。

大人向けじゃん。

過激すぎる。

特別番外編負物語第一話 『ポチリライト』

とある冬の地方都市。

そのとある町外れの丘。

ひな菊が咲き誇るそこに足を運ぶ少年がいた。

背の低く、顔立ちも幼い少年だった。

それもそのはずで、彼は今日10歳になったばかりなのだから。

肩まで伸びた黒髪を一つにまとめ、その目は蒼。

蒼衣着流しに、蒼い袴。

その上に同じく蒼の羽織り。

両手は肘まで包帯が巻かれていた。

真つ蒼な、少年だった。

彼はゆっくりと原っぱを踏みしめる。

やがて大きな、本当に大きな樹が見えた。

少年の短い人生においても見たことがないほど大きかった。

まるで 月までのその枝を伸ばそうとするかのように。

それを見つけて、少年はホッと一息つく。

それが彼の目的地なのだから。

数日前に彼の師匠に場所のみを教えられて、蹴りと共に言われた。

行け、と。

一言だった。

反抗したが無駄だった。

一年前に弟子入りして以来、無茶苦茶なことばかりだ。

そのことに頭を痛めながらも、進む。

やがて、巨木の下へ。

改めてみれば、やはり大きい。

小さな少年からすれば尚更だ。
その大きすぎる樹の下に 一人の青年がいた。
巨木の根本に座り込んでいる。
どこかの学校の制服だろうか。
眠るようにを伏せている。
ツンツンした茶髪。
取り立てて特徴のない青年だった。
その青年へと少年へと歩みを進める。
そして、彼我の距離が5メートルほどで、

「なにか、用か？」

眼を開けた。

赤茶色の瞳だった。

「 ああ」

少年 那須蒼一は答えた。

「あんたが 天王寺瑚太郎か？」

「いいや、違っ」

「へ？」

蒼一の間を抜けた声が響いた。

「おいおい待ってくれよ、俺はそのなんとかってヤツに会いに行け
って師匠に蹴飛ばされて此処まで来たんだせ？なのに違っ？ なら
アンタは何者だ？」

「ポチだ」

「……ポチ？」

「ポチ」

「……だれが付けたんだよ」

「俺のご主人様たちだ」

「う、こしゅ……？」

悲しいかな、この時10歳の蒼一にはよく理解できなかった。
とりあえず、置いていく。

それでも、名前が違うが、目当ての人物はコイツだろう。

「おほん。ならポチ、頼みがある」

「なんだ？」

「俺の宿題に付き合ってくれ」

そう言つて、羽織りを脱ぎ捨てながら蒼一は 構える。

右の拳を顔の前に。左の拳を腹の前。

両足は軽く開く。

腰を落とし、膝を軽く曲げて何時でも飛び出せるように力を溜める。

それを見てポチは、

「やれやれ、そういうのはごめん願いたいんだが」

めんどくさそうに立ち上がった。

「なにがなんだがわからないが、後ろのコイツを壊されたくないからな」

そう言って、足を踏み出した。

そうして。

そうして 那須蒼一、第一の負けの物語が始まった。

.....

「らあっ！」

空白の距離を、一瞬にして距離を詰める。
右の拳を突き出す。

数年後においては虚刀流という手加減の手段を得るが10歳の彼はそんなものは知らない。

小説なんて読めない。
故に蒼い気を纏った一撃は必殺だ。
幼い体軀からは考えられない一撃。
だが。

「……」

受け止められる。
普通に、受け止めらる。
何気なく。

「……！」

「そつちがふっかけてきたんだから場所くらい選ばせてくれ」

そう言いながら、投げ飛ばされる。

「うおっ」

大樹から引き離されるように。

空中で姿勢を整えながら、着地。

ひな菊が散るのに心を痛める余裕は、ない。

着地し、顔を上げれば目の前には、すでにポチがいた。

拳が来る。

速度と体重が乗っているのがよくわかる。

それには、同じように自分の拳をぶつける。

激突。

一度弾かれた。

その流れに逆らわず距離を取る。

後ろに飛び退き、すぐに右に跳ぶ。

次は、左に。

すぐに右へ。

右へ左に、小さい身体を生かして高速に動く。

体格が大きく劣るからこそその動きだ。

ポチの眼が混乱するように動くのを確認して、

「せいっ！」

前蹴り。

ポチの背を目掛けて。

確実に決まったと思った一撃だった。

当たった。

当たったが 効かなかった。
揺らない。

まるで大樹を蹴ったかのような感触。
衝撃がモロに返ってくる。

右足が、軋む。

顔をしかめていたら、軋んだ足を取られた。

またもや投げ飛ばされる。

否、投げ飛ばされる前に地面に叩きつけられた。

「が、はあ……！」

攻撃はともかく、今の蒼一には瞬間的には気を防御に回せない。
だから、衝撃がそのまま蒼一の身体を蹂躪する。

10歳の身体にはそれだけで必殺になりうる。

それでも、蒼一は動いた。

右足を掴んでいたポチの左足を蹴り飛ばす。

後転して、後ろに跳んだ。

跳んで、その反動を利用し再び飛び出す。

再びの正拳突き。

しかし、先程よりも多くの蒼光を纏った一撃。

開いた距離を詰める為の加速を余すことなく一撃。

後に彼のオリジナル奥義の一つになることになるモノのその原型。
それをぶちこんで

「んなっ」

それすらも 止められた。

「痛いな。でもなんだろうな もっと痛い拳をうけたことがある
気がする」

それに比べたら　なんてことないと。

ポチは呟く。

目を細めながら。

そして。

拳が、ポチの拳が。

蒼一の頬に突き刺さった。

そうして、呆気なく。

あまりも呆気なく那須蒼一は敗北した。

味気ないといえるほど、情けない戦いだった。

自分から喧嘩売って文句のつけようがない負けだった。

これが　一回目。

.....

「この世界は、もういつ滅びてもおかしくない
「いや、正気だから。変な目で見るな
「ほら、よく言うじゃないか地球温暖化とかマヤ予言がどうたらこ
うたら
「どうなんだろうな、あの予言
「ノストラダムスさんは思い切り外したけどさ
「いや、正直何百年何千年後のことの予言なんか外れて当然だろう
けどね
「まあ、マヤ予言にはまだ時間があるんだけど
「ん？ 話がずれてる？
「そうだな、話を戻そう
「この世界から争いは絶えない
「人間は傷つけ合い、争い合う
「そのせいで星は寿命を減らしているんだ
「ああ、星だって生きているんだ
「生まれて いつかは死ぬ

「そのいつかが近い」
「それだけ」
「どうするか、だって？」
「どうしような？」
「オレにもよくわからない」
「オレは生まれたばっかだから」
「マジだよ、マジ」
「オレはあの樹を媒介にして生まれた魔物なんだ」
「あー、魔物がわかんないか」
「まあ、人間じゃあないんだ」
「話を聞きたくなかったか？」
「そうかい」
「なら続けよう」
「そういや、さっきの天王寺瑚太郎って誰だ？」
「知らない？ 師匠に言われただけ？」
「ふうん？ なんだか、懐かしいような、そうでないような」
「聞き覚えがあるような、ないような」
「まあ、いいや」
「ん？」
「……何の話だった？」
「ああ、星の寿命の話か」
「星はいつか死ぬ」
「これは間違いない」
「人の力ではどうしようもないんだ」
「まあ、それでも……そうだな」
「少なくともあと一世代分……」
「君が大人になって子供を作るくらいの時間はあるだろう？」
「君、好きな子いるかい？」
「いない、か」
「オレはいる」

「なんだ？ おかしいか？」
「彼女はさ、月にいるんだ」
「……いや、自分でもおかしいなことを言ってるはわかってるって
正確には好きだと思っ子が月にいる気がするんだ」
「曖昧だけどさ」
「そんな気がするんだ」
「オレの魂がそう言ってる」
「オレは彼女に会わなくちゃならない」
「そして、彼女に伝えたい」
「世界はこんなにも美しいって」
「世界にはいい記憶だってあるんだって」
「世界は捨てたもんじゃないんだって」
「そう彼女に伝えたい」
「月にいる誰かを見つけて伝えたい」
「それが 俺の願いだ」

特別番外編負物語第一話 『ポチリライト』（後書き）

というわけでPV200000記念番外編負物語第一話『ポチリライト』でした。

蒼「思ったより早く載せれたな」

うむ。作者としては嬉しい限り。

蒼「ていうか、珍しいな。作者がこういう形で後書きを書くの」

まあね。本当はひたすら今回の話の補足説明をするつもりだったんだけど

蒼「けど？」

途中で間違えて消しちゃった……。

蒼「あらひ」

まあ、気にせず続けよう。

蒼「じゃあ、補足説明というかQ&Aの時間だぜ」

うむ。

最初は……

Q・rewriteの世界はどこまであるか？

蒼「あー、これは大事だろ。あの話最後スゴいことになってたからんで？」

ああ、簡単だ。

A・<Terra編の最後の混乱が風祭市内だけだったら>という感じ。

蒼「ふうん、なるほど。じゃあ世界規模の混乱はなかったわけか」

ああ。

ガイアもガーディアンも風祭の中だけだし、世間では何年か前に大きな地震があつたな、つてくらいの認識しかないよ。

蒼「まあ、それなら辻褄があわなくもないか……」

Q・コタさんはどういう存在？

蒼「そーだ、なんだあの人。攻撃通じねえし、オーロラとか血流操作使わないし」

そこらへんは特別ゲストに説明を任せよう。

蒼「ゲスト？」

というわけでカモン！

朔「どうも、こんにちは。ちはやさんの執事にしてナイト。朔夜です。今回は解説役に来ました」

イエーイ。

蒼「いやいや、アンタ全存在使いきって消えたんじゃないのかよ」

朔「フツ。そんなものは些細な問題ですよ。気にしてはいけません。というわけで、与太郎くんについて説明ですが、彼は私と同じ魔物、それも『船人』といわれる存在です」

蒼「ふなびと……？」

朔「ええ、そうです。簡単に言えば移民能力に特化した魔物です」

そこらへんは最近出たビジュアルガイドを参考したぜい。

朔「攻撃が通じなかったのは単純に齒太郎くんのスペックが高かったから。鍵　つまり篝さんと融合したことにより高いポテンシャルを誇っております。超人としての能力は……正直よくわかりませんね。書き換え能力や血流操作は使えないと思いますが、オーロラは使えるのではないでしょうか」

まあ、そこらへんは気にしないということぞ。

蒼「ふうん……。あとはなにかあるか？」

えーと、そうだな。

この世界においては、まだ瑚太郎たちは月に行ってません。

朔「まあ、さすがにパワーバランスが無茶苦茶になりますからね」

蒼「だなあ。ちなみ魔物つてのはどういう扱いなんだ？」

まあ、使い魔と同じだな。

コタさんはゴーレムのスゴい版みたいな。

パトラとかのとは桁違いだぜ。

後は……もうないか。

朔「いえいえ、一ついいですか？ 蒼一くんの服装はどうなってるんですか？」

えーと、アニメ刀語の最終話の七花の格好の蒼カラーで両手に包帯。

髪型も同じ感じ。

蒼「あー、この頃は長かったんだよなあ。つーか、最近短くしたと
うにかさせられたんだけど」

まあ、そこらへんは本編に繋がるからやめとこつぜ。

じゃあ、ここらへんで終わりかな。

蒼「だな」

朔「突発的に思いついた上に反応がこわいですけどね」

言うなよ。

ホントに怖いんだから。

えーと、改めてましてPV2000000ありがとうございます。

これからも当作品をお願いします。

お相手は作者、柳之介と、

蒼「那須蒼一に」

朔「なにかいいことあったらとりあえずキメましょう。朔夜でした」

その他質問合ったら感想版までどうぞ。

第4拳「負けるな、センパイっ！」by火野ライカ

「肘を腰に当ててー、手のひらを上にー」

せーの。

「支配者のポーズ、はっはっはっはっは！」

……………

「……………虚しい」

夕方の廃工場の中で一人俺はうなだれる。

そこらへんにコンテナが転がっていて、視界は悪い。

一人ぼっち。

言っておくが別に俺は一人で意味もなく、廃工場で支配者のポーズをするような根暗キャラではない。

那須蒼一はクールが売りなのだ。

ザ・クール。

ちゃんとした理由がある。

意味もなく、廃工場で支配者のポーズをする理由が。

いや、支配者のポーズの理由じゃなくて。

支配者のポーズに意味は無いよ。

星伽の護衛を放り出してここにいる理由が。

こんなところで一人で 待ち伏せをしている理由があるのだ。

「 来たか」

呟いた瞬間。

転がっていたコンテナから人影が飛び出した。

二人だ。

黒髪赤眼と金髪翠眼。

刀とトンファーを構えた少女。

金髪の方が先に来た。

「おりやつ!」

両手で顔の前に構えたトンファーの右が来た。

中々するどい。

それはぶつかる直前に左の手の甲で払いのける。

「はあっ!」

次は黒髪。

若干長めの日本刀。

なんでも彼女の得物のレプリカらしい。

ていうか、刃潰してあるのか、コレ?

唐竹割り。

縦一直線。

避けようとして。

ふと、思い出す。

そういえば、最近キンジと神崎がおもしろい訓練してたなあ。

だから、というわけではないが。

「っ!」

二指真剣白羽取り。

右の人さし指と中指での白羽取り。
仮にも虚刀流を習得しているのだ。
白羽取りなんて余裕だ。

余裕の余っちゃんだ。

視界の隅で金髪の方がさらに動いた。

同時に背後に気配。

奇襲狙いの二つだ。

これで今回の一年生チームは全員。

一年にしては良い連携だ。

連携としては一年でもトップクラスだろう。

まあ、だからこそ。

先輩として、二年生として。

後輩に、一年生に。

格の違いを見せつけてやろう。

白羽取りの指を外さずに右足を下げる。

半身になって、後ろの気配の小さい方を見る。

茶髪紫眼の小さい体をさらに姿勢を低くしていたから、

「ほれ」

「ふぎやー！」

右足で茶髪の肩を踏みつける。

同時にその足を支点にして左手を首の前に。

「なんとー！」

掲げた指で苦無を止めた。

黒髪翠眼が目を見開いている。

そこで金髪がリカバリ。

再びトンファーを突きだしたので、少し膝を曲げながらトンファーごと蹴りあげる。

そのまま足は顔の前に。

もう少し、膝を伸ばせば顎に直撃ルートだ。

さて。

右手、佐々木志乃の刀を白羽取り。その気になれば二指で折れる。

左手、風魔陽菜の苦無を白羽取り。右と同じ。

右足、間宮あかりの肩を踏みつけている。余裕で肩を碎ける。

左足、火野ライカの顔の前。膝を伸ばしたら思い切り直撃。

「はっはー、元気いいお前ら。なにかいいことあったのか？」

.....

さて、何故俺が廃工場で一年相手にバトっていたのかというと、説明するともものすごく面倒なのだ。

昨日、蘭豹に捕まっっている言われたのだ。
と言っわけ。

以下、回想。

「おい、那須。お前、アドシアードの格闘競技出るや」
ファイテング

「なにい？ いややとお？ ほおお、いい度胸やなあ。四か月前に
事忘れたとは言わせんでえ？」

「ほー。それでも断るんやな。んー。ええやろ、勘弁したるわ」

「なんや、その目は。勘弁したるゆうてるやろ」

「その代わりや、その代わりややってもらいたいことがあるんや」

「ええか？ ええな」

「出なくていいから代わりをお前が決めるや。方法は……そつやな。
何人かとまとめて模擬戦とかでええから」

「嫌とは言わせんで？ これでも譲歩したったんやからな？」

「な？」

以上、回想。

……何も言うまい。

そんなこんなで、朝から2年の強襲科アサルトや諜報科レザド近接格闘型の連中
と模擬戦をしまくった。

……いや、マジで殺しに来るんだよなあ。アイツら。

キチガイすぎる。

ナイフも刀も刃潰してないし。

まあ、全員ぶん殴ったけど。

そんなこんなで、2年が終わり。

それで終わりだと思ったら、1年パーティーが1組いた。

なまじ知り合いだったが故に、無碍にも出来なかった。

間宮ちゃんと佐々木ちゃんと風魔ちゃんは神崎と星伽とキンジの
戦妹だったりするし、ライカちゃんはあるルートで知り合った。

「まあ、いいんじゃないの？ お前ら。1年にしちゃあソコソコだ
な。けどなあ、先輩から言わせえ貰えば……」

「そんなことはどうでもいいですから白雪お姉さまのことを教えてください」

「……」

……ええー。

コイツ先輩の話し飛ばしたよ。

おまけに間宮ちゃんも風魔ちゃんも当り前の顔してるし。

ライカちゃんだけは苦笑い。

いい奴だなあ、ほんと。

実は、常識人。

「うん、まあ。楽しそうにやってるぜ？
魔剣マホウケンがホントマホウケンにいるかわかんないから四六時中いつしょにいるし」

「アリア先輩とですか？」

「師匠とでござるか？」

「……」

「おいコラ、些細な事でガンとばしあうな」

こいつら実は仲良くないだろ。

絶対、風魔ちゃんだけは間宮ちゃんたちにくつついてきたただけだ。

腕試しとか言ってる。

「基本はキンジだなあ。それに俺と神崎がローテでウチの嫁が遠距離から警戒みたいな感じだ」

「そうですか……、大丈夫でしょうか……」

頬に手を当てて、溜息を付く佐々木ちゃん。

ここだけ見れば星伽に続く大和撫子なんだけどなあ……。

中身も星伽に続くヤンデレなのだ。

ヤンデレちゃんだ。

「アリア先輩がいるなら大丈夫だよ、志乃ちゃん！」

鳶穿とびうがちというけつたいな技を使う謎の間宮ちゃん。

神崎中毒の間宮ちゃん。

アリアコンプレックス。

……なんかのタイトルみたいだ……。

「いやいや、師匠がいるのでござるから万事問題ないでござるよ」

腕を組みながらうんうんと頷く風魔ちゃん。

あいては違えど間宮ちゃんと同じ。

キンジ中毒のニンジャもどき。

キンジコンプレックス。

他にも患者がいそうだな。

「そ、そうですよね！ 狙撃科スナイプのレキ先輩もいるなら大丈夫ですよ
ね！」

「そっだよー！」

「むむむ」

「……」

……
あのさあ、お前ら。

今さっきお前ら4人同時に抑えた先輩がいるのに無視か？

無視なんだな？

一応、『拳士最強』なんて呼ばれてんだぜ？

綴なんかは強襲科アサルトの切り札ジョーカーとか言ってたんだぜ？

……ちくせう。

ぼん、と肩に手が置かれた。

見れば、温かい目をしたライカちゃん。

「負けるな、センパイっ！」

泣いても、いいですか？

……

「あ。あとセンパイ、頼まれてたレキシセンパイのフィギア18号（軍服版）できましたよ。今日の朝郵送しときました」

「おお！ すまんな、いつもいつも」

「いいですって。アタシもやりたくてやってるんですから」

「ありがとな、これでまた嫁コレクションが増える……！」

「ていうかセンパイ、フィギアとかどこに保管してるんですか？」

「ん？ ほら、俺って4人部屋を二人で使ってるからな。空き部屋をゲームやら漫画とかで埋めて、本棚の裏にショーケースを作ってるんだぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134y/>

緋弾のエリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

2012年1月11日00時53分発行